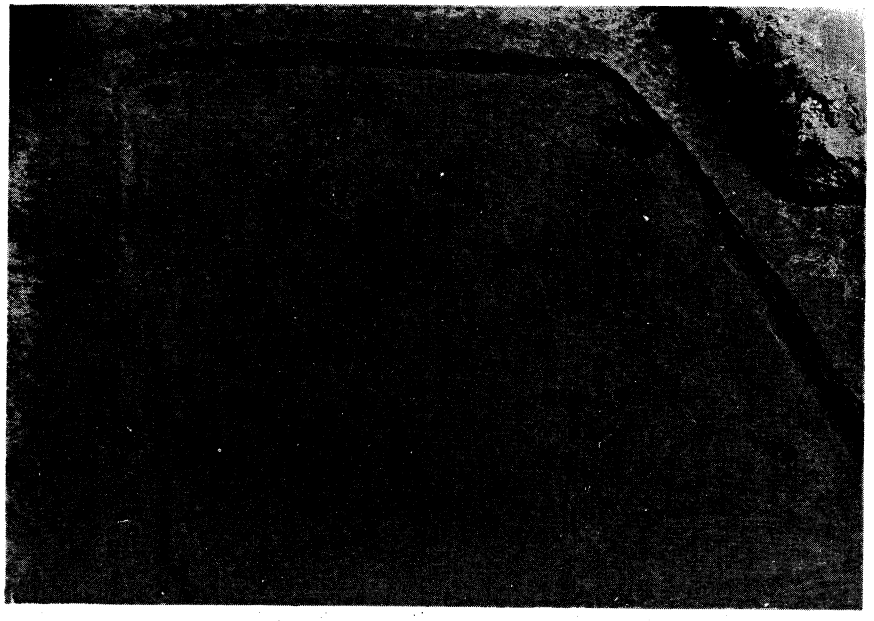
郷土誌資料　第六集

和光市のむかし

白子宿上遺跡

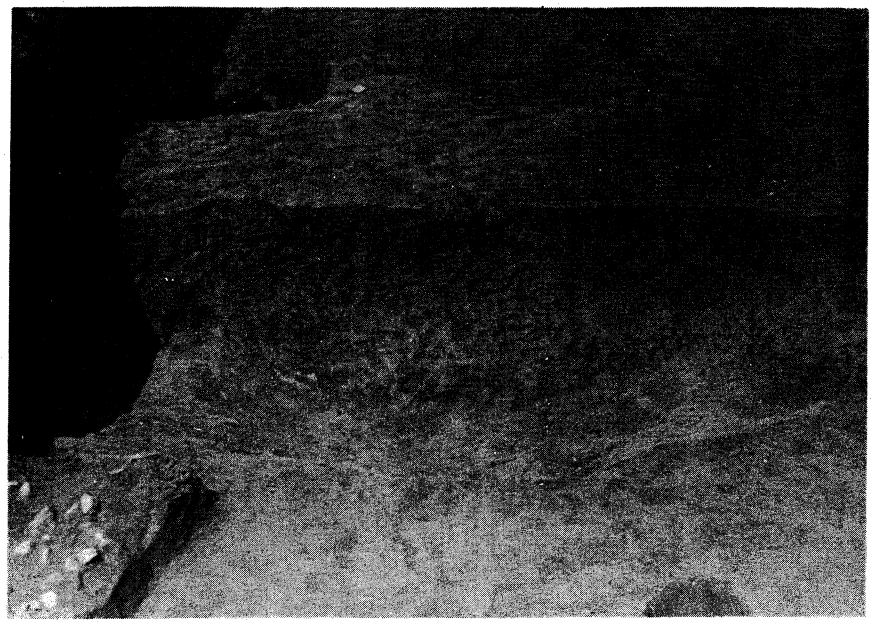
和光市教育委員会

白子宿上遺跡近景

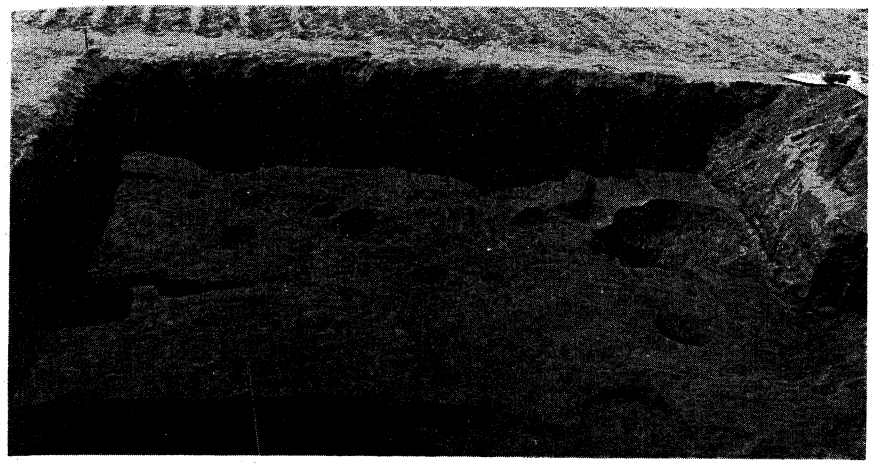


白子宿上遺跡1号住居址

3　号　住　居　址

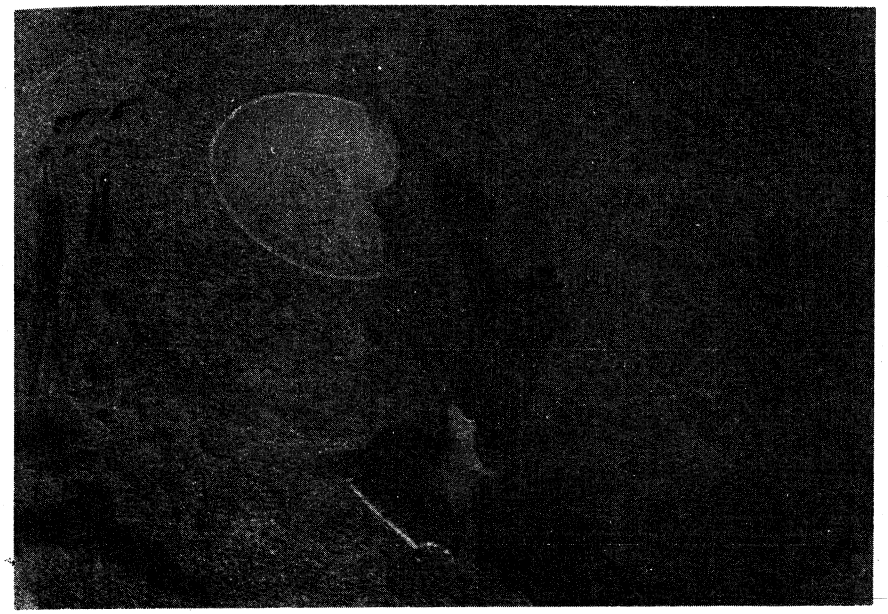


土　壙　8



1. 2 トレンチ拡張区遺構群

集　石　遺　構



1号住居址貯蔵穴内出土状態

3号住居址出工高杯形工器

序

昨今の地域の開発が盛んになり都市化が進んでくると，文化財の保存が容易でなく，このことに関して各地で各種の問題が提起されています。当市においても例外ではありません。古文書は散いつし，民俗資料はどんどん失しなわれ，口碑伝説はいつのまにか消滅し，埋蔵文化財も土地開発によって破壊され，またされるおそれが多分にある情勢です。

埋蔵文化財の発掘調査は他の文化財調査に比して，やや大がかりの準備および経費を必要とするということもあり，既に11年前に一応縄文，弥生，古墳の各期の遺跡が発掘調査されているので，さらに切迫の機の到来を待つ考えもありましたが，文化財委員各位の熱意に感じ，土地開発の状況をも勘案して，発掘調査実施に踏み切ったわけであります。

今回の場所も既に発掘した遺跡も同様白子川に臨む高台にあり，清れつな湧泉に近く居住の地として好適であったろうことは容易に想像されます。

先人の残したあとを一つ一つ解明し，この郷土の歴史を明らかにして市民各位のこの土地に対する愛着をいよいよ深めるための資料となることを念願し，この報告書を郷土誌資料第6集として刊行する次第です。

この発掘調査に当り，ご懇切なご指導を賜わった県教育局文化財の専門員柳田先生，文化財係谷井先生に厚くお礼を申し上げ，実際に発掘調査に当られた市文化財委員各位，埼玉大学考古学研究会学生各位，朝霞高校生諸氏，市内中学生諸君のご苦労に対し，深甚な謝意を表します。

遺跡所在の地主新坂一夫氏には発掘調査を快諾され，かつ発掘調査中は物心両面にわたり，多大なご迷惑をおかけしたにもかかわらず終始ご協力いただき深く感謝いたします。

昭和46年3月31日

和光市教育長　冨　岡　吾　良

目　　次

序

例　言

1　白子宿上遺跡の立地環境……1

2　発掘調査に至るまでの経過……3

3　発掘調査の経過……3

4　遺　構……5

　住居址……6

　炉　穴……8

　土　壙……8

　集石遺構……13

5　出土遺物……14

　土　器……14

　石　器……34

6　まとめ……35

あとがき

挿　図　目　次

第1図　白子宿上遺跡の位置……1

第2図　白子宿上遺跡全体測量図……5

第3図　1号住居址実測図……6

第4図　2A号住居址実測図……7

第5図　3号住居址実測図……8

第6図　炉穴および土壙……9

第7図　2B号住居址および土壙群……11．12

第8図　白子宿上遺跡第1，2，3群土器拓影図……15

第9図　白子宿上遺跡第4群土器拓影図……17

第10図　白子宿上遺跡第4群土器拓影図……19

第11図　白子宿上遺跡第4群土器拓影図……20

第12図　白子宿上遺跡第4，5，6，7群土器拓影図……21

第13図　白子宿上遺跡第8，9群土器拓影図……22

第14図　白子宿上遺跡第10群土器拓影図……25

第15図　白子宿上遺跡第10群土器拓影図……26

第16図　白子宿上遺跡第10群土器拓影図……28

第17図　白子宿上遺跡第10，11群土器拓影図……29

第18図　白子宿上遺跡出土土器底部破片……30

第19図　白子宿上遺跡住居址出土土器……32

第20図　白子宿上遺跡出土石器……34

例　　言

1．本書は昭和45年8月4日～8月15日の12日間にわたって発掘調査を行なった和光市白子宿　上遺跡の発掘調査報告である。

2．発掘調査は和光市教育委員会が主体となり実施した。

3．本書の執筆は柳田敏司の指導，監修により，永長海晃，谷井彪，宮崎朝雄，増田正博，並木隆が行ない，編集を永長海晃，谷井彪が行なった。

4．図版の製作，写真撮影は谷井彪が主に行ない，埼玉大学学生の協力があった。

5．発掘調査の関係者は下記のとおりである。

担当者　柳田敏司，谷井彪

事務局　和光市教育委員会職員　井口末男，荒井経，寺元那雄，南雲善則，斉藤栄一，園部千賀，大堀武子，島田美佐江　永長海晃

埼玉大学学生　宮崎朝雄，野中松夫，佐藤茂樹，増田正博，神田徳雄，並木隆

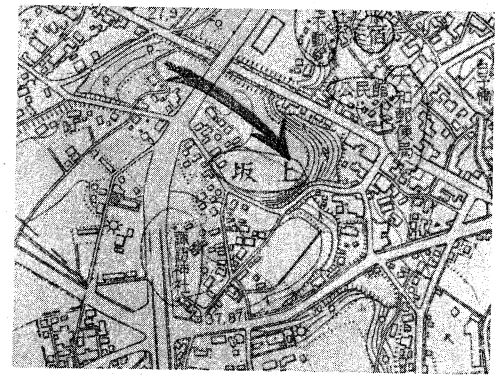
和光市文化財保護審議委員，専門調査委員

富沢　譲太郎	笹沼　正己	小谷野　信太郎	柳下　芳雄
本橋　　喬	池田　和己	宮原　昭二	小寺　　甫
野田　　寿	山田　正光	富岡　　実	深野　栄治
鈴木　　芳	岡田　うた	安藤　和江	野浦　正二
福島　正夫	園尾　哲郎	谷井　　彪	

1.　白子宿上遺跡の立地環境

白子宿上遺跡は埼玉県和光市大字白子字宿上に所在する。東武東上線の和光市駅より1.3Km，東京都側の成増駅より1Kmのところで，ほぼその中間に位置している。

遺跡の南側には東京都と埼玉県を分ける白子川が流れ，北側にはオリンピック道路とよばれる県道川口―練馬線が走り，東側には国道254号（川越街道）が走っている。



第1図　白子宿上遺跡の位置

遺跡周辺の現況は南側の沖積地に住宅が密集し，西側は小さな道を距てて地主の新坂一夫氏宅などの宅地が立ち並んでいる。東側は国道254号（川越街道）を距ててペプシコーラの大きな工場がある。

白子宿上遺跡は荒川の右岸に広がる武蔵野台地上にある。この武蔵野台地には柳瀬川，黒目川，白子川等の川によって幅広い桶状の解析谷が奥深く形成されているほか，台地縁辺部には小さな解析谷も多数入り込んで複雑な地形を形成している。遺跡はこの白子川の解析谷に面しており，荒川に面している台地縁辺部から西南へ1.8Km奥に入った地点にある。

遺跡の北西側には荒川に面した台地縁辺部から谷中川の小さな解析谷が入り込み，遺跡をのせている台地を細長い支丘状に形成している。この谷は本遺跡周辺では浅くなり，しだいに平坦になっている。遺跡の西側は沖積地に突出し，東側の川越街道にあたるところは水田が入り込んでいたと思われる。今回調査を行なった地点はちょうどその中間にあたる部分である。

遺跡の範囲は，東側は川越街道の走っている部分が谷となって区切られ，北側は県道川口―練馬線までのようである。西側は突出した台地までは確認されるが，それ以西の範囲の確認は住宅が立ち込んでいるため不可能であった。南側は急な斜面となり，台地縁辺部が切られてきり立った崖になっている。

遺跡のある台地上面は標高30cmを計り，平坦になっている。白子川の沖積地との比高差は約14mを計る。

武蔵野台地の縁辺部は縄文時代から歴史時代に至るまで各時期の遺跡が多数ある。和光市の位置する武蔵野台地の縁辺部もその例外でなく，各時期にわたって多数の遺跡がみられる。特に荒川に面した台地縁辺部および白子川に面した縁辺部には各時期にわたって遺跡が占地している。その他，谷中川の解析谷に面したところにも縄文期を中心として点々と遺跡がみられる。

和光市内でかって出土した土器をみると，弥生時代後期から古墳時代前期のものが圧倒的に多かった（註1）。今回発掘した地点では弥生後期の土器の出土はなかったが，発掘期間中，附近の人が発掘現場にこの遺跡出土という弥生町期の土器を持参したので拝見したが、この遺

跡でも、地点によって弥生町期の遺構を存在していよう。

白子川の解析谷に面した台地上の遺跡としては本遺跡の南西1Kmのところに牛房遺跡がある。かって天地返しにより多量の土器を出土しており，現在はほとんど壊滅状態にある。縄文中期勝坂，加曽利E式土器が多量に出土しているほか，古墳時代前期の五領式土器も多数出土している。遺跡の北東の東武東上線の南側の場所では縄文後期初頭の称名寺式土器の出土を伝えている。さらに東武東上線を越えた白子小学校校庭からは前野町期の住居址が発見され，同遺跡出土の壺形土器2個体は市の指定文化財となっている(註2)。そのほか，縄文前期の関山式土器の出土もある。

城山地区は縄文前期の白子貝塚がある。また通称市場狭と呼ばれる高台一帯には縄文早期の井草期，前期の黒浜期，諸磯期等各時期の土器が散布しているほか，古墳時代後期鬼高期～平安時代国分期の集落でもあった。

この支丘状に伸びた台地の荒川，白子川に面した突端に近い吹上地区では各時期の遺跡が狭い範囲内に複合してみられる。主なものは，縄文中期の吹上貝塚に代表される集落，後期称名寺～加曽利B期にかけた集落，縄文晩期姥山台，安行ⅢC式期の集落(註3)，さらに，古墳時代前期の集落，後期の横穴墳（註4）等バラェティーに富んでいる。

荒川に面した台地縁辺部も白子川に面した台地縁辺部と同様に多数の遺跡がある。吹上遺跡群の西には県道川口―練馬線を挟んで弥生町期から五領期にかけての集落である天神ヶ谷戸遺跡がある。

また，天神ヶ谷戸遺跡から谷中川の谷を隔てたところには妙典寺遺跡があり，古墳時代前期五領期，和泉期の土器の出土がある。

妙典寺遺跡の西，酒井浄水場周辺には縄文早期茅山期および弥生後期および古墳時代前期の土器が散布している。この遺跡から小さな谷を隔ては四ツ木地区には縄文後晩期の大きな遺跡がある。なお，最近，奈良時代に入ると思われる一括遺物の出土があった。

この両遺跡の東方にある独立丘陵上は弥生町期の集路跡（註5）がある。

和光市の西端氷川八幡神社周辺には弥生後期から五領期の遺跡があり，天地返しにより多量の土器が出土している。

なお，白子宿上遺跡周辺は宿上と呼ばれており，江戸時代にはこの台地の下一帯は川越街道の宿場町として栄えたといわれている。

註1　谷井彪・高山清司「大和町の遺跡と出土土器（弥生・古墳時代）」埼玉考古6号　昭和43年

註2　柳田敏司　大和町のむかし「城山遺跡」　大和町教育委員会　昭和33年

註3　岩井住男「大和町出土の縄文時代晩期の土器について」　鳳翔9号　昭和46年

註4　柳田敏司　大和町のむかし「吹上横穴墳」　大和町教育委員会　昭和34年

註5　註1および谷井彪「大和町新倉牛王山出土の土器」埼玉考古4号　昭和41年

2.　発掘調査に至るまでの経過

昭和45年1月22日，市の文化財保護審議委員会が開かれ市内の各所で各種の開発事業が盛んに行なわれているが，埋蔵文化財の保護体制はこのままでよいのかという意見が提出された。

当市で埋蔵文化財の発掘調査を行なったのは10年前で，城山遺跡，吹上横穴墳，吹上貝塚がその対象となり，一応の成果を得ている。

しかし，種々の事情により，埋蔵文化財に関する調査は中絶し，市民の関心もやや薄れぎみでっあた。

一方，地域の開発事業は日ましに激しくなり，埋蔵文化財は開発の波におし流され，知らぬまに破壊されるような状態であった。

当日の市文化財保護審議委員会では，このような状態に対して，教育委員会で開発事業によって遺跡が破壊される前に積極的な保護対策を立てなければならない旨協議された。

市教育委員会ではこれを受け，埋蔵文化財の分布調査を行なうとともに，計画的に発掘調査を進めることになった。

そこで，1月29日と2月27日の両日，市の文化財審議委員や専門調査委員と現地に行き，特に開発が近く予想される遺跡を重点的に，詳しい調査を行ない，発掘調査の対象地を四ヶ所にしぼった。

5月7日に最終の現地調査を行ない，白子宿上遺跡を発掘対象地として選んだ。

幸い，市当局ならびに土地所有者の絶大なご理解をいただき，昭和45年8月4日～15日の12日間にわたって実施することになったものである。　（永長）

3.　発掘調査の経過

8月4日　（火）

午前10時，発掘現場に調査参加者が全員集合し，教育長から調査参加者に挨拶があり，その後参加者全員で調査についての全般的な打ち合せを行なった。

打ち合せ終了後，遺跡全体の表面採集を行なう一方，発掘区にトレンチを設定し，作業を開始した。

トレンチ作業の結果，地表から70cm位まで天地返しで攪乱を受けていることが判明する。遺物包含層は薄く，場所によっては遺物包含層を全く欠いて直接ローム層に至るところがあった。遺構は1トレンチ1区で壺形土器口縁部，甑形土器の出土があり，住居址をおもわせた。また2トレンチ5区6区にかけて住居址らしい落込み2カ所を発見した。

8月5日　（水）

昨日調査した1トレンチの精査を行なうとともに3トレンチ，4トレンチの調査に入る。

1トレンチ西半や2トレンチ全般にローム層は発見されず，遺構が全面に広がっているようであった。

3トレンチでは小さな土壙および炉穴を検出し，トレンチ西端では溝状遺構および住居址が検出された。4トレンチはローム上面まで攪乱が及んでいるため，遺構は全く検出されなかっ

た。

8月6日　（木）

トレンチの測量を始める。2トレンチで発見された住居址の規模を確認するため補助トレンチを入れ，拡張すべき範囲を確認し，拡張作業を始める。3トレンチに発見された土壙および炉穴の調査・実測等を行ない土置き場所を作る作業を開始する。これに併行して，住居址の拡張作業に勢力を向けた。

炉穴に隣接した土壙中には小石が敷かれた状態であった。

8月7日　（金）

1号住居址は拡張を行なった後，土手を残して覆土の除去作業を始める。覆土中からは縄文早・前・後期の土器を主体とし，若干の古墳時代前期五領式土器の出土があった。住居址の時期はその状態等から五領期であろうと推定された。

午前11時頃より雨が降り始め作業を中止する。

8月8日　（土）

1号住居址の覆土の除去作業を続ける。五領期と推定できる土器が出土し始めた。高坏形土器脚部，器台等が壁に沿い，あるいは貯蔵穴内から出土し，住居址廃絶時の状態を示していた。炉，ピットの一部を確認する。

この作業に併行して1トレンチ1区および2トレンチ1区の遺構が集中している場所の拡張作業を行なう。耕作土が厚く，作業は困難をきわめる。また，3トレンチに残る土壙の調査も並行して進める。

今回の発掘地点は予想外に耕作土が厚く，遺構が複雑に入り組んでいるため，今回の調査期間では調査設定区を全掘することが不可能と判断し，現在作業を進めている場所に限定し調査を進めることにした。残される部分は後日機会をみて調査することとして埋め戻す。

8月9日　（日）

1号住居址は前日に引き続き作業を行ないほぼ全掘する。柱穴の検出を試みたがしっかりした柱穴はついに発見できなかった。明日実測，写真撮影を残すのみである。

1トレンチ1区の拡張作業はほぼ午前中に終了，午後よりプランの確認作業に入る。

1トレンチ1区で以前出土した土器の部分を精査するうち，黒色土中に貼り床を発見し，住居址であることを確認した。地表面から60cm位までは耕作を受けているため所々床面を欠く。住居址のプランはほぼ方形になると推定される。

1トレンチ3区にある3号住居址のプランの精査を行なう。

8月10日　（月）

1号住居址の床面を清掃し，写真撮影，実測を行なって調査を終了し，埋め戻しに入る。

昨日プランを確認した1トレンチ3区にかかる3号住居址を掘り下げる。全体の1/5ほどが今回の調査区にかかっているのみである。床面はしっかりしており，柱穴，貯蔵穴，焼土など検出。遺物には高坏形土器，甕形土器の破片が出土。

1トレンチ1区，2トレンチ2区拡張区の本格的な調査に入る。遺構の前後関係確認のため土手を残すと共に土手に沿って溝を掘る。

8月11日　（火）

3トレンチ1区にかかっていた溝状遺構とおもわれる続きを発見，掘り上げた結果住居址であった。3トレンチを埋め戻したのが残念である。

2A号住居址下の住居址を精査し，全掘する。出土土器は花積下層式土器のみであったが，住居址の時期は弥生後期とおもわれた。この住居址を掘り下げたため土壙の切り合い関係がはっきりした。

1号住居址の埋土作業を終了する。

8月12日　（水）

拡張区北側にみられた集石址の調査を行なう。集石址下の土壙の有無を確めたが認められなかった。土手の層序図を取り各遺構の前後関係を順次調査する。

8月13日　（木）

拡張区にある各遺構を順次掘り下げる，実測，写真撮影をあわせて行う。ほぼ各遺構の掘り上った夕刻，ローム土を埋めた大きなピットを発見する。表面上はローム面とほとんど変らなかったので発見が遅れた。ピットの1/3ほどを底面まで調査し，覆土の堆積状態の断面図をとる。壁面に沿って黒色土が流れ込んだような状態で堆積し，その上をローム土で埋められていた。

8月14日　（金）

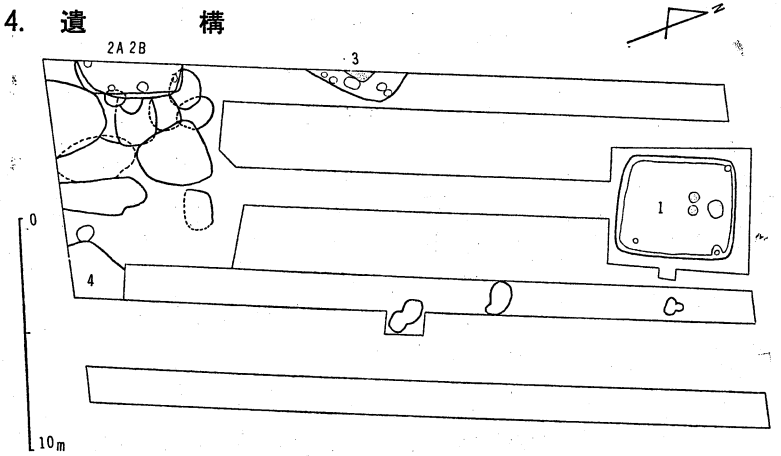
昨日残った大きなピットをローム土から順次掘り下げる。ローム土の下の黒色土中からは縄文前期花積下層式土器，縄文後期堀之内Ⅱ式土器が出土し，縄文後期のものと判明する。

午後から拡張区の埋め戻し作業をベルトコンベアーを使い行なうが僅かに残る。

8月15日　（土）

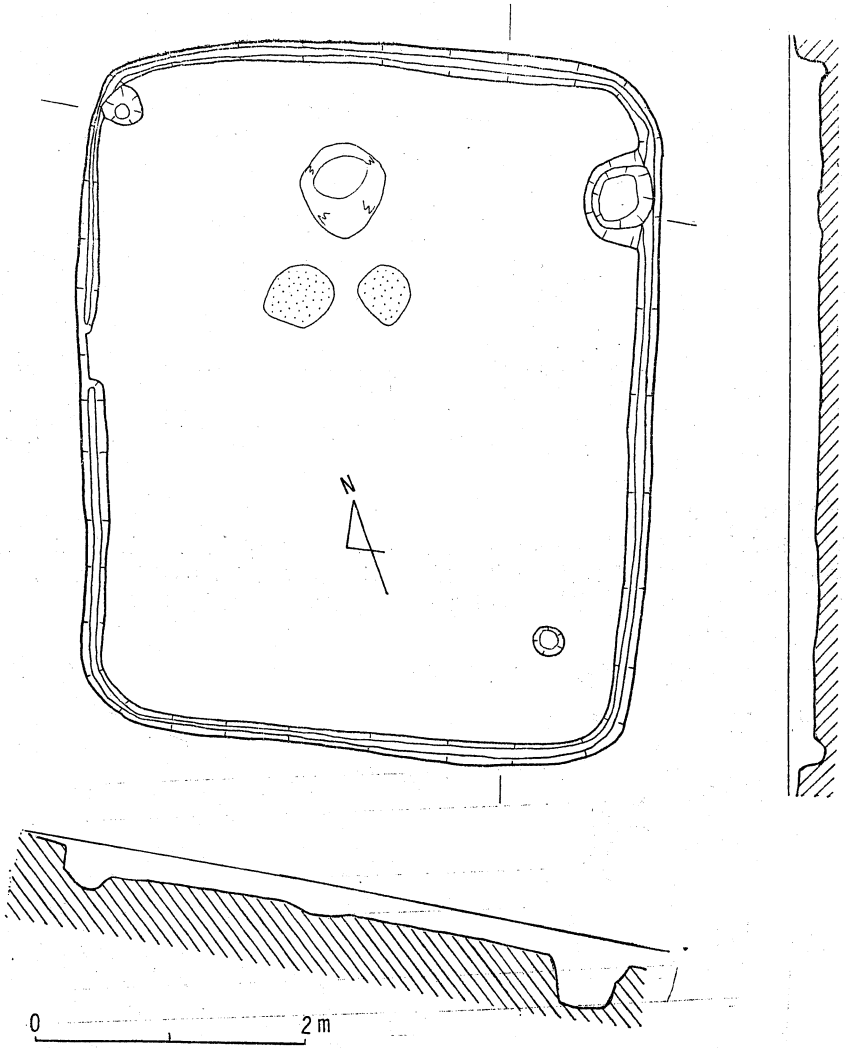
埋め戻し作業が終了し，発掘調査は全て完了する。　（谷井）

4. 遺　　構



第2図　白子宿上遺跡全体測量図

今回の発掘調査で発見された遺構は住居址5軒，炉穴2，土壙17，集石遺構1である。しかし調査日数が限定されていたため完掘した住居址は1号住居址のみで，他の住居址は部分的に確認したのみに終わった。



第３図　１号住居址実測図

１号住居址

長辺 520 cm短辺 410 cmを計る隅丸長方形の住居址である。主軸はN―15°―Eである。壁高はローム面より20cmを計る。周溝は壁に沿って認められたが，北側と東側の周溝が深さ10cmであるのに対し，南側と西側は深さ 5 cm と浅い。西側中央部では約40cm にわたって途切れている。床面上に焼土ブロックが３ケ所認められたが，南よりの２つがローム面まで焼けていた。床面は中央と南側がやや低く軟弱であったが，北壁から北東隅ピットに沿ったところはやや高く，良く踏み固められた良好な床面である。ピットは３ケ所認められた。北西隅のピットは径

30cm，深さ17cm，南東隅のピットは径20cm，深さ８cmで，柱穴と思われる。他の隅には確認できなかった。北東隅のピットは２段に掘られた貯蔵穴で，60cm×40cmで，深さは30cmを計る。高坏形土器脚部と器台形土器が貯蔵穴内の底面から浮いた状態で出土している。

２Ａ号住居址

第１トレンチ西端で発見された住居址である。プランは長方形を呈すると思われる。一辺の長さ 480cm を計る。この住居址はローム面への掘り込みが浅く，暗茶褐色土を壁としているため，壁や床面の確認は困難であった。壁高は20cmを計る。周溝はめぐっていない。ピットは壁に沿って４ケ所検出された。ピットの深さは10cm程度で浅い。

出土遺物は五領期の甕の底部・壺の口縁部・甑形土器が床面より出土している。

２Ｂ号住居址

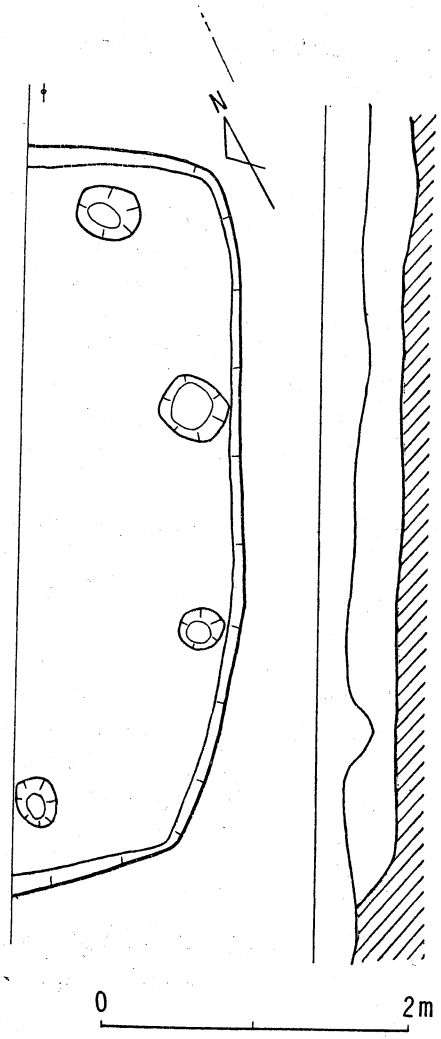
２Ａ号住居址の下にあった住居址で，ローム層を床面としている。プランは壁の立ちあがりがはっきりしなかったが，2号住居址よりやや丸みをおびている。中央やや北よりに少量の焼土があったが，炉になるか不明である。ピットは住居址をめぐって５ケ所確認された。いずれも径30cm，深さ５cmと浅く，本住居址に併うものかは不明である。

出土遺物は花積下層式土器の破片が数片出土したのみである。

３号住居址

第１トレンチ東側に$^{1}/_{5}$ほどかかった住居址である。壁高は20cmを計る。周溝はない。床面，壁とも硬いが，床面の一部は凹凸が激しい。1トレンチ東側の断面の部分に多量の焼土が認められた。やや床面を掘りくぼめており本住居址の炉と推定される。壁近くの５個のピットのうち，中央のものは50cm×20cm，深さ40cmで，多量の炭化材を含んでいた。貯蔵穴と思われる。他のピットの性格は不明である。

出土遺物は高坏形土器，甕形土器の口縁部

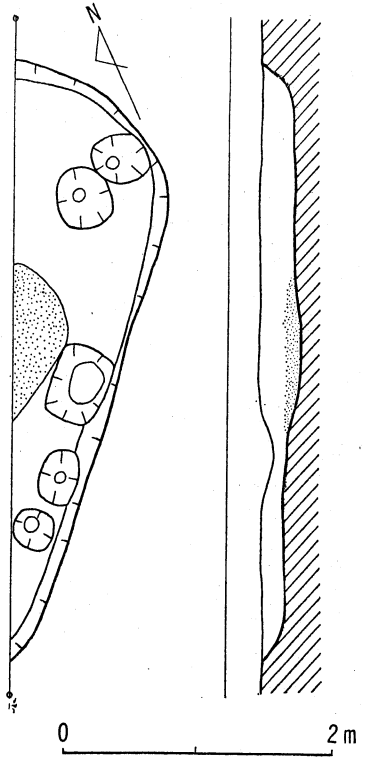


第４図　２Ａ住居址実測図

破片が出土している。

4号住居址

3トレンチに一部に発見された住居址で，北西コーナーの部分を確認しただけである。覆土は2層にわけられ，上層に黒色土，床面上に暗褐色土が堆積していた。床面の状態は良好である。出土遺物は五領式土器の破片が若干出土したのみである。



第5図　3号住居址実測図

炉穴1

3トレンチ6区で発見されたもので，南側の一部を土拡4が切っている。プランは長軸を南北に持つ楕円形を呈すると思われる。規模は長径105㎝，短径60㎝である。底面は中央に向かってなだらかに落ち込んでいる。中央部には径20㎝の小ピットがある。焼土は炉穴内にレンズ状に堆積しており，厚いところで20㎝を計る。この焼土層の下には焼土を霜降り状に含んだ暗褐色土が5㎝程堆積していた。この土層は底面の小ピット内にも堆積していた。炉穴内にはかなりの焼土があるが，全体的にみて熱を強く受けたと思われる面はなく，一部に焼土ブロックが確認されたのみである。

出土遺物は茅山式土器の破片が出土している。

炉穴2

2A号住居址によって西半分を切られている。プランは長径120㎝，短径80㎝の楕円形を呈している。覆土は焼土を多量に含む黒褐色土で，一番厚いところで6㎝を計る。壁は比較的垂直に立ち上がっており，底面は熱を受け，ローム面が焼けている。

出土遺物は茅山式土器の破片が出土している。

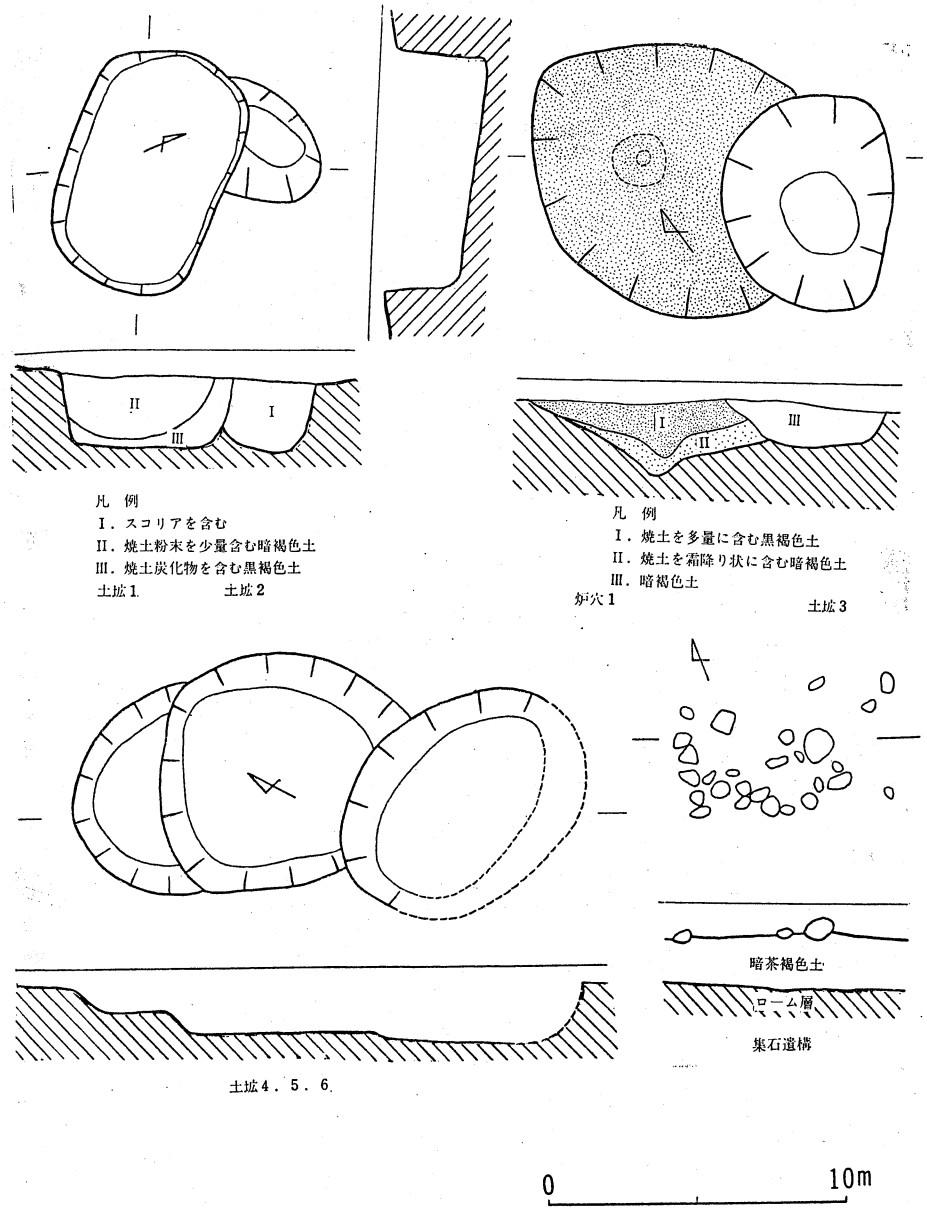
土壙1

土壙2によって切られているため形態は不明である。土壙1の近くでは底面が立ち上り始めるのでそれほど大きな土壙ではない。深さはローム上面より23㎝を計る。覆土は暗褐色土である。

出土遺物はない。

土壙2

長径80㎝，短径50㎝の隅丸長方形を呈する。長軸は北西一南東である。深さはローム面より



第6図　炉穴および土壙実測図

計り北側で30cm，南側で20cmで底面が北側にやや傾斜している。土層は上層が黒褐色土，下層が暗褐色土で，両層とも焼土，炭火物が霜降り状に入っている。土層は下層に比べて混入の量が多い。土拡上層には径4cm～8cm位の小石が敷かれていた。

出土遺物はない。

土壙3

炉穴1を切ってつくられた土壙である。プランは72cm×50cmの不整楕円形を呈する。覆土は暗褐色である。

出土遺物はない。

土壙4．5．6

土壙4は土壙5によって切られている。プランは不明である。深さ7cmはである。

土壙5は土壙6に南側の一部を切られている。プランは径80cmの円形に近い形をしている。深さは15cmである。

土壙6は南側に攪乱を受けているが，長軸を東西に持つ楕円形になるものと推定される。長径85cm、短径55cmで，深さは20cmである。

土壙7

長径240cm，短径180cmの楕円形のプランを呈する。鍋底状の底面である。覆土は暗茶褐色土で，中央にほぼ10cm堆積している。中央のピットは深さ10cmで浅い。

出土遺物は花積下層式土器，堀之内Ⅱ式土器の破片が出土している。

土壙8

南側の一部が調査区域外のため未確認であるが，長径360cm，短径180cmの長楕円形のプランを呈すると思われる。中央最深部はローム面より60cmを計る。壁の立ち上がりは北側が他よりもいくぶん緩傾斜である。底面や壁の状態は良好である。覆土は北半に小石，土器片を含む黒褐色土が底面まで堆積している。

出土遺物は花積下層式土器，堀之内式土器の破片が多数出土している。

土壙9

この土壙は北半分を調査しただけであるが径280cmのほぼ円形に近いプランを呈すると思われる。土壙の掘り込みは暗褐色土より認められ，ローム層へは5cmにすぎない。底面は平坦で壁は垂直に立ち上っている。東側の壁は土拡11の覆土で，ローム土を埋めたと思われる黄褐色である。覆土は2層みられ，上層は黒褐色土，下層は黄褐色土である。

出土遺物は花積下層式土器，堀之内Ⅱ式土器の破片が多数出土している。

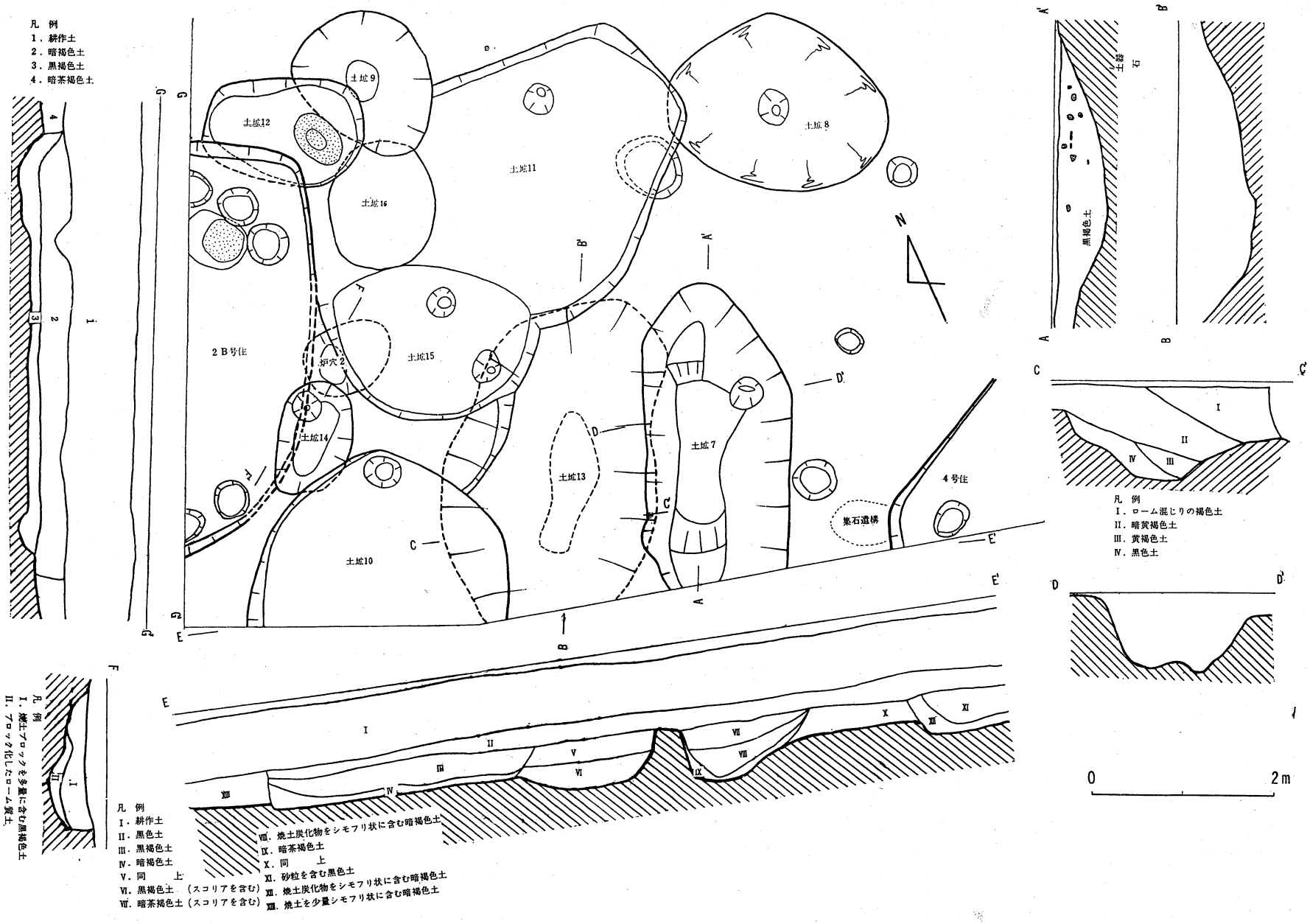
土壙10

プランは長径280cm，短径270cmの長方形に近い不整形を示すと思われる。ローム面よりの掘り込みは10cmで浅い。覆土は暗褐色土で，底面は平坦である。

出土遺物は花積下層式土器，堀之内Ⅱ式土器の破片が出土している。

土壙11

土壙8，土壙9，土壙12，土壙13によってその一部を切られている。プランは南の一部が未確認であるが，長径370cm，短径230cmの長楕円形を呈すると思われる。底面の最深部はロー


凡 例
1．耕作土
2．暗褐色土
3．黒褐色土
4．暗茶褐色土
土坑9
土坑12
土坑11
土坑8
土坑16
2B号住
炉穴2
土坑15
土坑14
土坑13
土坑7
土坑10
4号住
集石遺構
N
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
I
土器
石
黒褐色土
凡 例
I．ローム混じりの褐色土
II．暗黄褐色土
III．黄褐色土
IV．黒色土
凡 例
I．焼土ブロックを多量に含む黒褐色土
II．ブロック化したローム質土
凡 例
I．耕作土
II．黒色土
III．黒褐色土
IV．暗褐色土
V．同 上
VI．黒褐色土（スコリアを含む）
VII．暗茶褐色土（スコリアを含む）
VIII．焼土炭化物をシモフリ状に含む暗褐色土
IX．暗茶褐色土
X．同 上
XI．砂粒を含む黒色土
XII．焼土炭化物をシモフリ状に含む暗褐色土
XIII．焼土を少量シモフリ状に含む暗褐色土
0
2m

ム面より 100 cmを計り，壁の立ち上がりはなだらかである。覆土は壁面に沿っての20cmの黒色土層があり，その上にローム土を埋め込れている。ローム土は三層に分けられる。当初は他のローム層と区別がつかず発見が遅れた。

出土遺物中より花積下層式土器，堀之内Ⅱ式土器の破片が多数出土している。

土壙12，13，

この２基の土壙はローム面への掘り込みが浅く，しかも互いに切り合っていたのでプランがはっきりつかめなかった。底面はほぼ平坦で，壁高は15cmを計る。

出土遺物はいずれのピットからも花積下層式土器，堀之内Ⅱ式土器の破片が出土した。

土壙14

土拡16を切ってつくられている。プランは長径 100 cm，短径70cmの楕円形を呈する。底面中央の深さはローム面より20cmであり，すり鉢状を呈している。堀之内Ⅱ式土器の破片が出土している。

土壙15

南西部を２Ａ号住居址によって切られている。プランは長径170cm，短径100cmの楕円形を呈する。底面中央はローム面より約15cmを計る。ダラダラと立ち上がっている。東よりに長径60cm，短径，40cmの楕円形プランを呈する浅いピットがあり，焼土がみられた。

出土遺物は花積下層式土器，堀之内Ⅱ式土器の破片が出土していた。

土壙16

プランは長径 170 cm，短径 130 cmの楕円形を呈する。底面の最深部はローム面より44cmを計る。壁はなだらかに立ち上がっている。

出土遺物は花積下層式土器，堀之内Ⅱ式土器の破片が出土している。

集積遺構

４号住居址の北面コーナーに接する所に位置する。ローム面より18cm上の暗褐色土中に小石の集石が見られたものである。プランは発掘時に一部の小石を取り上げてしまったためはっきりしないが，ほぼ径60cmの円形を呈すると思われる。実測後小石を取り除いて精査したがピットの存在は認められなかった。集石の上下の土層より堀之内Ⅱ式土器の破片が出土している。

（宮崎・増田・並木）

5. 出土遺物

土器

この遺跡の出土遺物の大半は土器で，僅かな打製石斧等の石器が出土したのみであった（なお，表面採集では多数の石鏃が発見されている）。表土（耕作土）が70cm近くあり，縄文期の遺物包含層はほとんど破壊されてしまったので，包含層の認められるところでも10cm程度であった。そのため，土器は細片になったものが多く縄文期の完形品は全くみられない。古墳時代前期の五領期の住居址からは小形の土器を中心に完形に近い土器もあったが，大形壺形土器の場合は上半部が耕作により破壊されていた。

縄文期の遺構は炉穴と土壙である。土壙内から出土した土器はほとんど小破片で量も少なく遺構に伴う土器はみられなかった。また，各土壙より出土した土器の間に年代の経過を示すような差異はみられなかったので遺構ごとにまとめず遺跡全体を対象として分類することにした。

第1群土器（第8図1～13）

この群の土器は縄文早期前半の撚糸文土器群である。撚糸文あるいは縄文で器面を飾る。出土した土器は図示した13片が全てである。

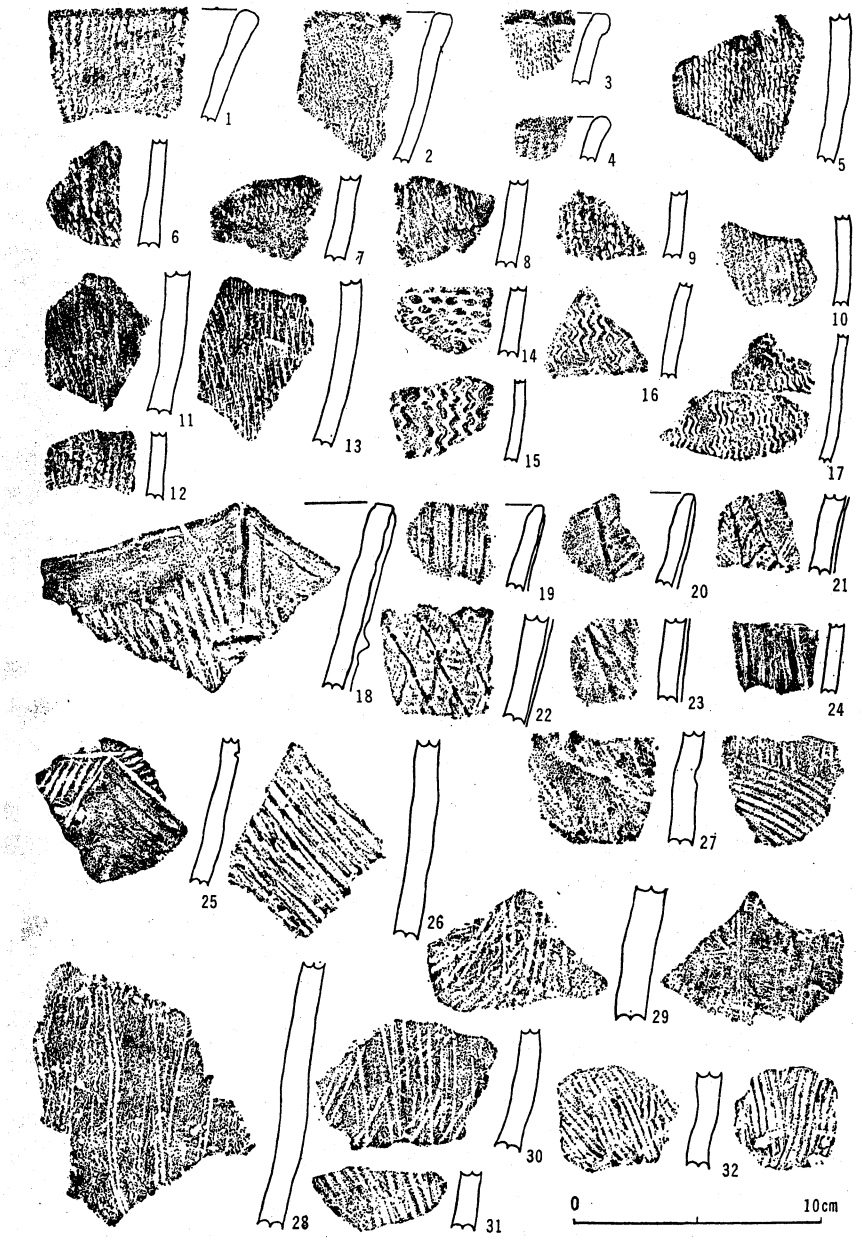
撚糸を押捺したもの（1～3，5～9・11）が量的に多い。文様の施文は器面全面に縦位施文がされる。量が少ないので器形の詳細は不明であるが，口縁部附近では直線状に僅かに外反しているのみで，屈曲の少ない器形であろう。口唇部が僅かに肥厚する点が共通しているが，その形態は3者とも若干異る。1口唇部は先端が丸みをもち，2は平坦につくられ，外面に粘土紐を貼り付けて口縁部を作っている。3は口唇部に折り返しがみられる。

文様の施文は器面外面のみで，口唇部にはみられない。2，3は口縁部上端を僅かにあけて施文を初めている。撚糸文の原体は一段の撚紐R，あるいはLを巻き付けた絡条体を使用する。Rの撚紐を巻き付けた絡条体を使用したもの（2～8，13）が大半を占め，撚紐Lの絡条体を使用したものは1のみであった。軸に巻きつける回数は5～6回のようである。器面は撚糸文の施文後整形しているものが大半で，撚糸文は部分的に摩り消されている。

13は他の土器と異なり特殊な効果をあげている。撚紐を軸に間隔をあけて巻きつけた原体を使用し，器面やわらかいうちに深く回転押捺したものである。

縄文の土器は4片のみであった。口縁部破片は1片のみで，口唇部形態は撚糸文土器と同様なつくりを示す。縄文の撚りはLRのもの（4，12），RLのもの（10，11）があり，全体に浅い施文である。施文後は器面を磨くものが多い。なかでも11は顕著である。文様効果としては縦方向を意図しており，したがって回転方向は斜行である。

撚糸文，縄文の土器は施文原体は異なっているが，土器製作上では類似点が多い。文様効果も同様な意図をもっており，また胎土には小砂粒を多く含み緊緻な土器である。内面の整形は11の土器を除けば整形を行うが，ザラついた器面を呈するというこの期の特色的な内面である。



第8図　白子宿上遺跡　第1，2，3群土器拓影図

第2群土器（第8図14～17）

押形文土器を一括した。4片のみである。楕円押形文が1片，山形押形文が3片である。

楕円押形文は横位回転である。原体の長さは施文されたものから推定すると約2cmである。軸に陰刻された楕円をみると丸くなったものと，浅く平坦なものがあり，不均衡である。同一の楕円のあらわれ方は一つおきになっており，軸には2個の楕円が陰刻されている。

山形押形文は縦位回転である。軸の長さは16，17から判断すると楕円と同様2cm前後とみられる。同一の山形の現われるのが一つおきのようである。したがって，軸には二つの山形が陰刻されていると思われる。15の山形は幅広く，16，17は細い山形である。軸の太さが大きく左右している。

山形文の土器の胎土は雲母片を多く含んでいるほかは狭雑物はほとんどみられない。概して器壁は薄く0.4cm～0.5cmである。器面内面は良く磨かれている。楕円文をもつ土器の胎土は黄雲母片，石英粒を多く含み，焼成は悪い。器壁は厚く0.8cmで，器面内面の整形は粗雑である。

第3群土器（第8図18～32）

縄文早期後半茅山系土器群の最初にあたる野島式土器を一括した。文様は胴部上半を微隆起線で幾何学的に文様構成したものである。他の土器はほとんど条痕文のみの土器で，前の時期の子母口式期に盛行した無文土器は少ない。この群の土器の胎土は比較的繊維少なく，焼成が良好で，緊緻な土器が多い。条痕も明瞭である。出土量は少なく図示したほかは条痕のみの土器である。後述の第4群土器の条痕と区別がつかないものもあるので明らかにこの期のものと思われるもののみを図示した。

文様をもつ土器は波状口縁を呈するもの（18，20）と平縁のもの（19）がある。文様は微隆起線を幾何学的に組み合せたもの（20，23）と単純なもの（18，19）がある。その他，25のように微隆起線を沈線に代えて描いたものがある。

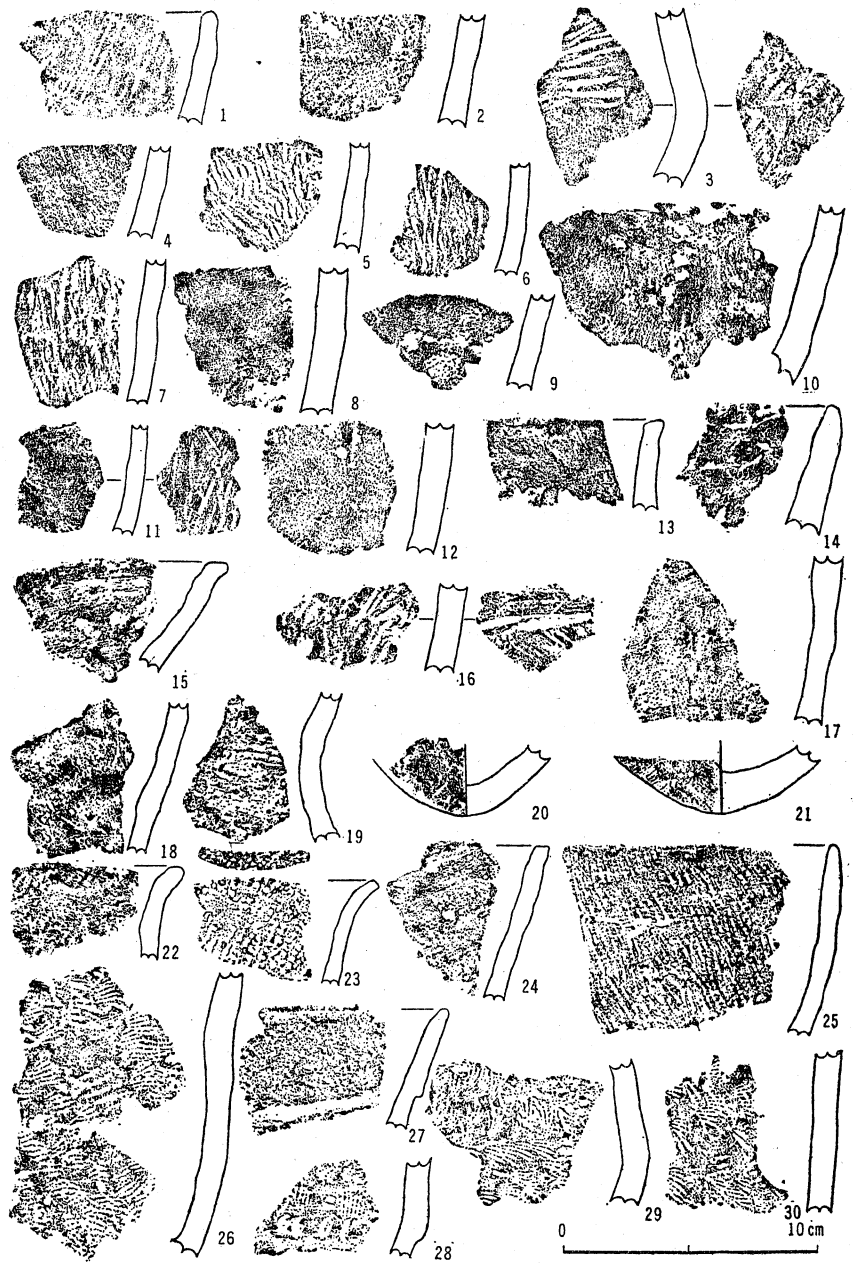
出土量が少ないので詳細は不明であるが，大きく2つのグループに分れるように思われる。1つは1～19，21，22で，他は20～23，25である。前者は隆起線の断面が三角形状を呈し，後者はカマボコ状である。また文様帯の地文は前者が条痕文を残しているのに反し，後者は文様帯の複雑化とともに無文化する傾向がある。

第4群土器

花積下層式土器を一括した。この群の土器は縄文後期の土器とともに本遺跡の主体をなす土器である。図示した資料が少ないのは細片が多いのと花積下層式土器が比較的簡単な土器構造であることに帰因する。条痕文（擦痕文）土器，無文土器，貝殻背圧痕文土器，羽状縄文土器，沈線文土器，刺突文土器，撚糸圧痕文土器があり，このうちいくつかの要素が一個体の土器に組合せられるものもある。

第1類土器（第9図1～7）

器面に条痕文・擦痕文がみられる土器を一括した。口縁部破片は1片のみである。条痕文土器は大きく二つに分けることができる。一つは胎土の繊維含有量が少なく，小石をあまり多く含まず，多くの場合雲母片を含む土器である。色調は赤褐色・黄褐色を呈し，器壁がほぼ同様な色調を示す。焼成は悪く脆いものが多い。条痕は浅く，細いものが多く。ハケ目状の条痕



第9図　白子宿上遺跡第4群土器拓影図

の
ものもある。他の一つは胎土に多量の繊維を含み，土器の芯の部分が表面の色調にかかわらず黒く炭化している。小石等の夾雑物が少ない。条痕は細いハケ目状のものである。条痕の施文は土器があまり乾燥しないうちに施文されたため明瞭なものが多い。この種の土器のつくりはより前期的な色彩の強いものである。器形は屈曲の少ない単純なものが多い。なかには3や16のように頸部でくびれ胴部で張る土器も出現している。

第2類土器（第9図8～12）

器面を磨いた無文の土器を一括した。器面整形以外の土器のつくりは第1類土器と類似している。胎土には2種類あり，焼成，色調なども第1類土器のあり方と類似している。11にみられるように器表面は平滑に磨かれ，内面に条痕をもつ土器もある。このことは他の無文土器が条痕を付した後磨いているものもあることを示している。

口唇部形態は繊維を多量に含むもの（13，15）は平坦な口縁を作り出している。繊維の少ない赤褐色を呈する土器（14）は先端を尖らしている。この傾向がこの類の全てをあらわしていると思われないが，その一部を示しているであろう。

この類に属する丸底状の底部が2片発見されている。発見された底部は繊維含有量の少ないものに属する。

第3類土器（第9図22～30，第10図1～21）

貝殻背圧痕文で器面を飾る土器である。出土量は比較的多い。大形破片がないので全体の器形は不明であるが，口縁部の破片や特色ある胴部破片から様々な形態および器種のあることがわかる。貝殻背圧痕文のモチーフをもつも多いが，資料が絶対的に少ないので正確な分類は困難である。

口縁部破片は5片である。口縁が外側にそり外反し，口唇上端を丸くつくるもの（第9図22，23）や口縁部が直線的に外反し，口唇が平坦なもの（第10図），内彎ぎみの口縁で，口唇が尖りぎみのもの（第9図25），羽状縄文土器によくみられる復合口縁を呈し，器壁は内側より厚さを減じ先端を尖らせたこの時期特有の口縁部形態を呈するもの（第9図27）がある。

胴部は張るもの（第9図28，29）があるほか屈曲のない胴部破片もある。底部は揚げ底で底面にも貝殻背圧痕文がみられる。

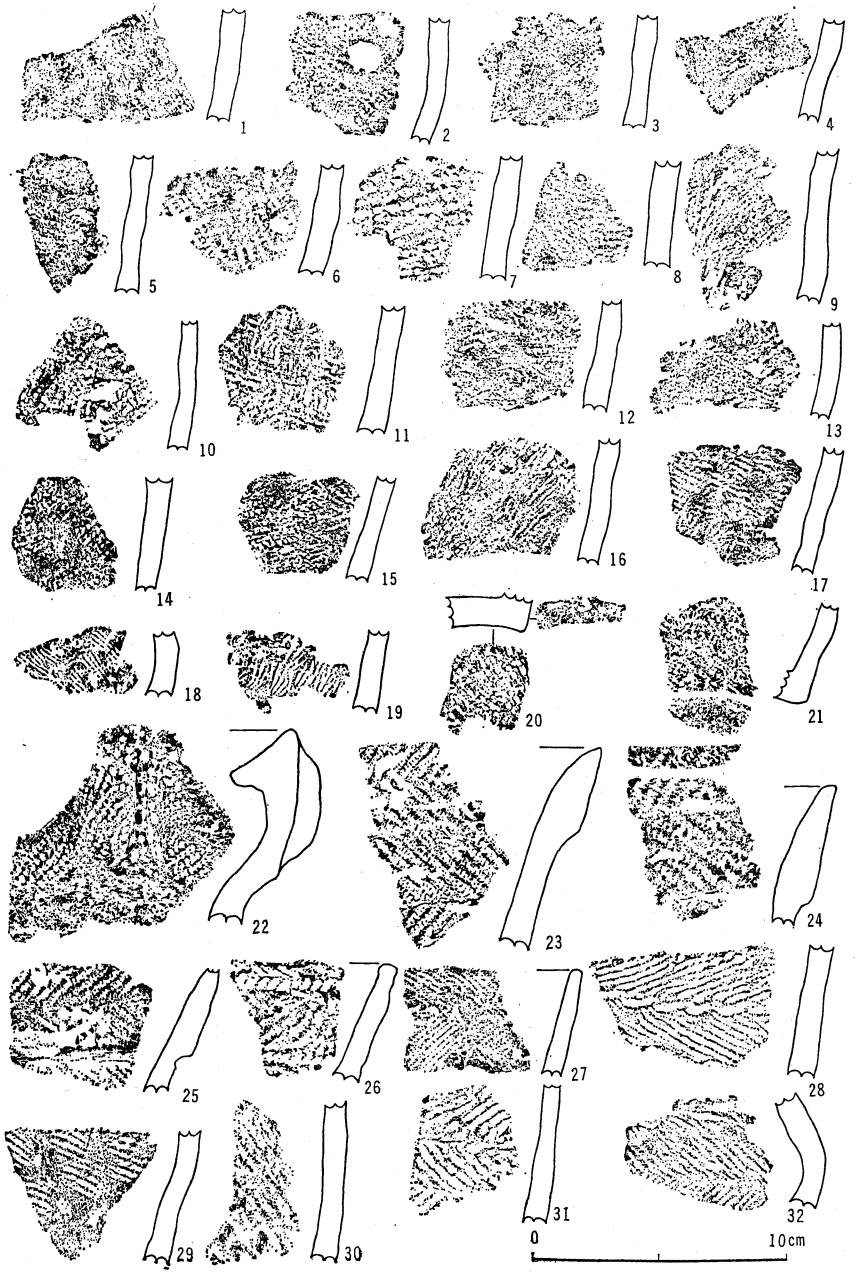
貝殻背圧痕文の文様モチーフはいくつかの種類がある。貝殻背圧痕文を一定方向に揃え押捺したものが最も多く，なかには従来いわれている疑縄文的なものもある。器面にまばらに押捺されたもの（第9図24，第10図3～5，12，13）もある。また特殊なものとして縦施文と横施文を組合せたもの（第10図11）があるが量は少ない。そのほか特別な文様効果をあげたものに第9図26がある。

胎土は一般的には繊維を多量に含んだ，いわゆる前期的な土器が多い。一部の土器の胎土は第1類，第2類土器の一部にみられるような胎土，焼成，色調を示しているもの（第9図26，28～30，第10図6，7）が含まれている。

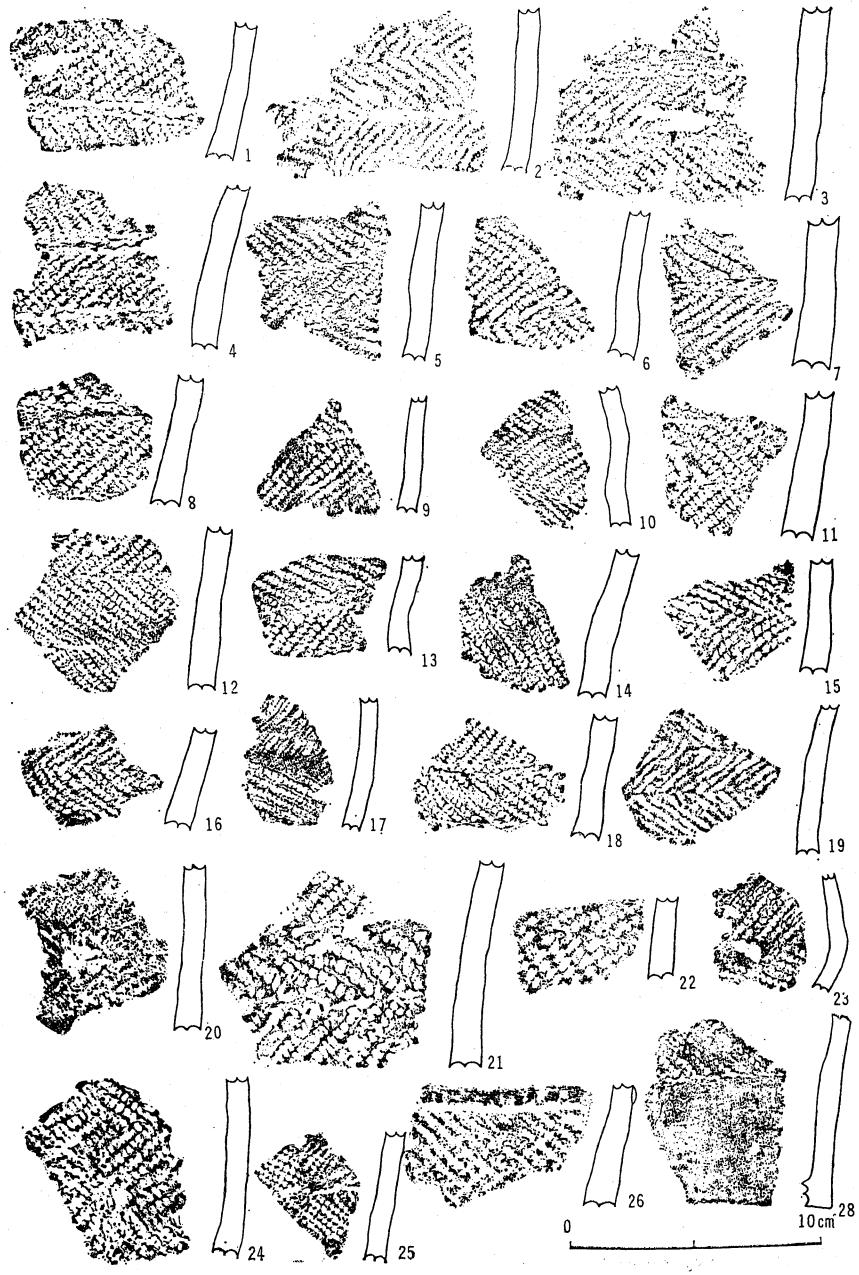
第4類土器（第10図22～32，第11図1～28）

器面を羽状縄文で飾る土器である。この群のなかで主体となる土器である。

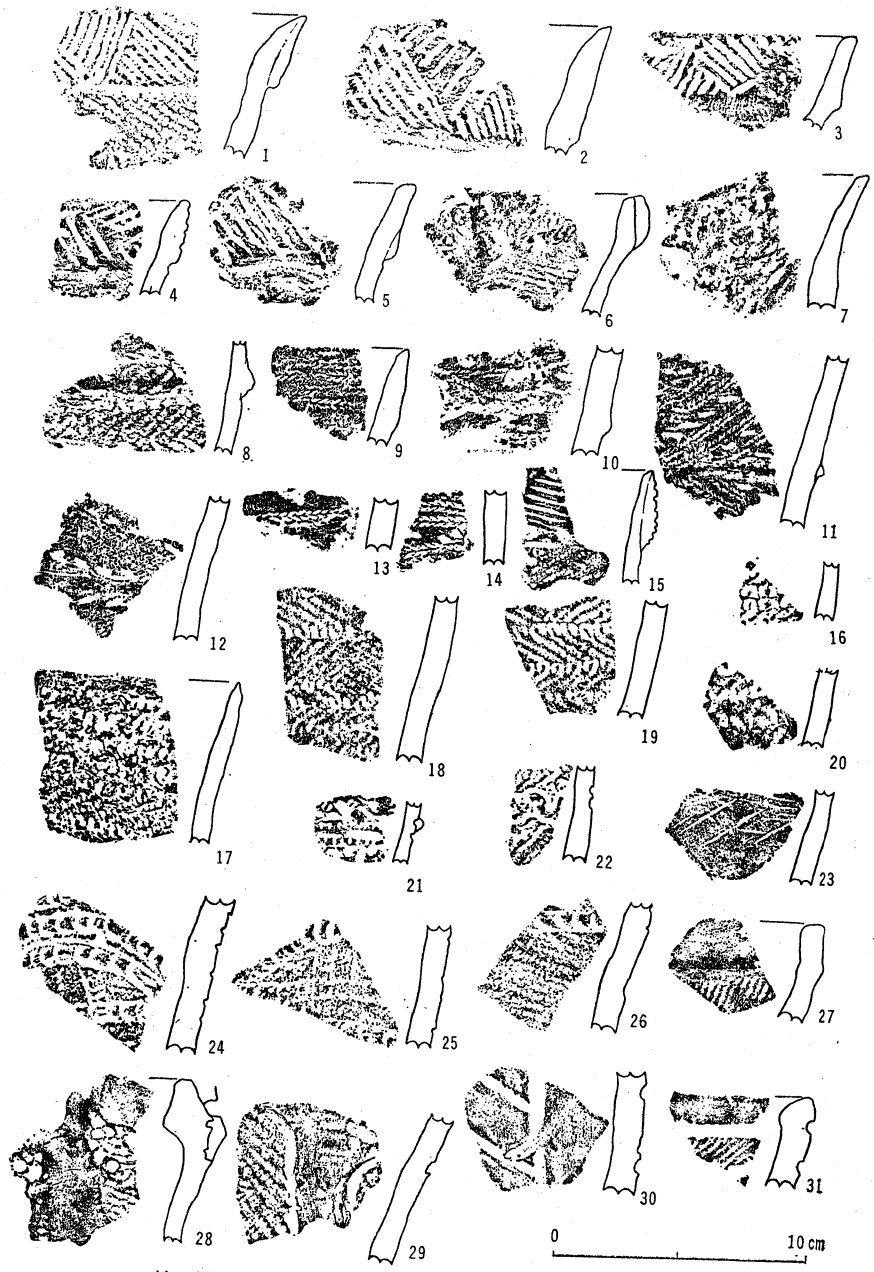
器形は口縁部が外反し，頸部でくびれ，胴部で張るものと外反する口縁から屈曲せず底部へ



第10図　白子宿上遺跡第4群土器拓影図



第11図　白子宿上遺跡第４群土器拓影図



第12図　白子宿上遺跡第４，５，６，７群土器拓影図

移行するものとがある。口縁部は第12図のように波状口縁になるものもあるが，基本的には復合口縁を呈する平縁の土器である。

口唇部形態は土器の内面から壁厚を減ずる手法で，口唇部は幅の狭い平坦な面を作り出すものが普通である。時として上端に縄文が施文されることがある（第10図24）。一般的には復合口縁でない場合も同様な形態を示すものが多いが，この遺跡では第10図26，27のように口縁部上端まで同じ壁厚のものしか発見されなかった。

土器のつくりは精粗によって若干の違いはあるが一般に胎土には多量の繊維を含み，器面内面は良く研磨されている。器面にはこの時期特有の凹凸がみられる。焼成は土器によって異り，色調は黄褐色から黒褐色まで様々である。

第10図22は波状口縁の土器で，台状把手がつき，外面には縦の隆起が貼り付けられる。縦の隆起の上および両脇には刺突文がみられる。他の縄文に比して不規則である。

器面外面に施される羽状縄文は単節のものが主体で，若干の無節縄文（第10図27～31）がある。第6図22の口縁部にみられる縄文が不規則のほか全て羽状の帯縄文を構成する。第28図の無節の羽状縄文はこの期には珍らしく結節のみられるもので，撚りの異なる原体を結んで回転させている。一般の羽状縄文は撚りの異なる原体を転がして羽状を構成している。したがって，土器が乾燥しないうちに施文されるので文様帯の境は盛り上っている。

羽状縄文のなかで特異なものとして菱形を構成するものがある。この場合，後続する関山式期の土器と同様に同一の縄文帯では同じ撚りの原体を使用して，横回転，縦回転で行なっている（第11図2，12，24，25）。

第10図28は刻目のある突帯がめぐり，両側には刺突文が付けられる。この時期の特色的な文様モチーフの一つである。

第10図29は底部附近を無文とした土器で，底面は擦痕状を残している。

第5類土器（第12図1～5，15）

復合口縁部を呈し，口縁部に鋸歯状の沈線群で飾られる土器である。第4類土器の典型的なものと同様な器形を呈すると思われる。口唇部は先端を細くし，上端を平坦につくるこの期の特色的な形態を示す。復合口縁部は三角形に区切られ，その間に隣接する三角形と異方向の沈線で鋸歯状に構成する。

口縁下に刺突のあるもの（2）や沈線が引かれるもの（4，5）がある。口縁下の文様は羽状縄文と思われるもの（1，4，5）と貝殻背圧痕文のもの（2，3）がある。貝殻背圧痕文は細かい。

胎土，焼成，色調は第4類土器と同様である。

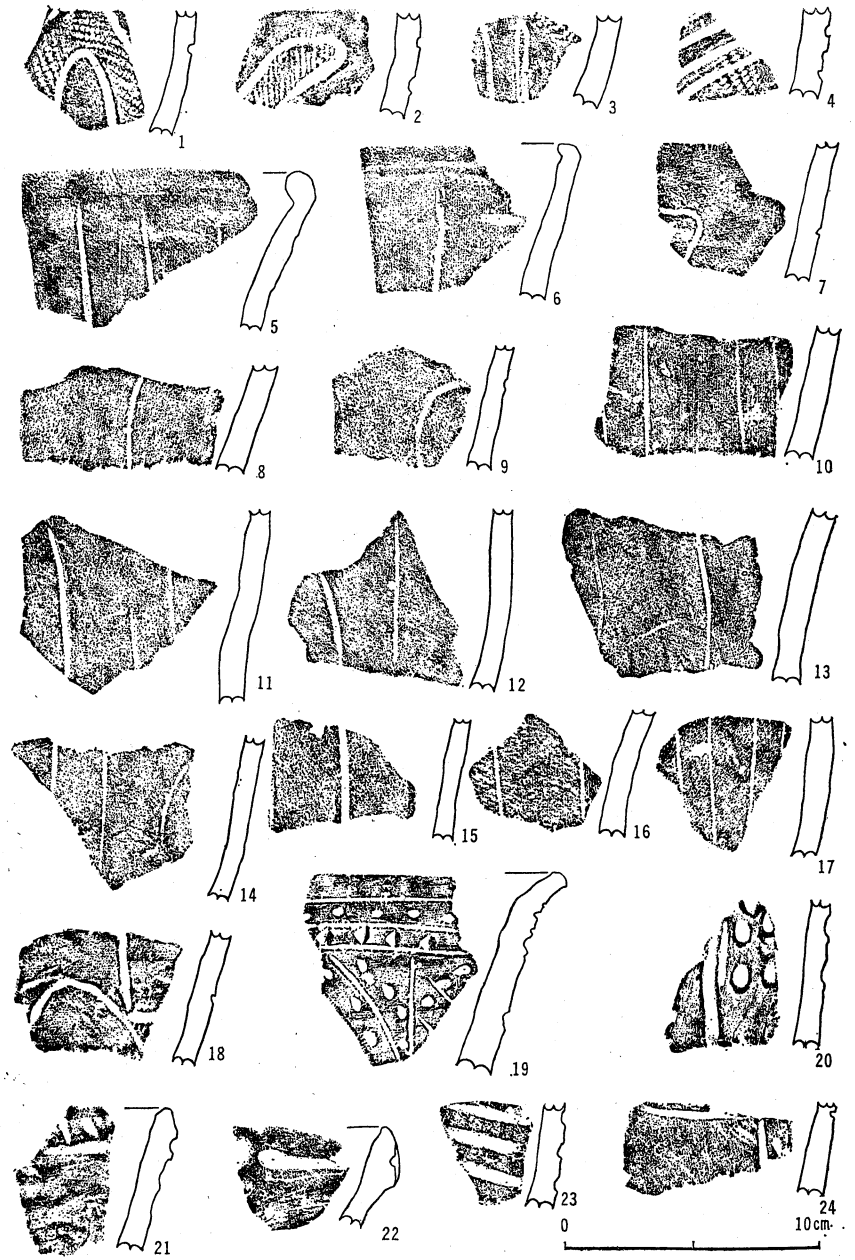
第6類土器（第12図6，7）

6は復合口縁を呈し，口縁部に刺突文を充塡するものである。口縁には縦の突帯を貼り付け，両側に刺突文がみられる。刺突文は半截竹管による。胴部は無節の羽状縄文である。

7は波状口縁に突帯のみられるものである。土器のつくりは第5類と同一である。

第7類土器（第12図9～14）

器面に撚糸圧痕文が施文される土器である。突帯で文様帯を区切り2段，3段に及ぶもの



第13図　白子宿上遺跡第8，9群土器拓影図

（11，12）があった。器形は復合口縁を呈するもの（10）もあったが，一般的には復合口縁にならないものが多い。口縁下は羽状縄文になるようである。

撚糸圧痕文は２本の撚糸を単位とし，平行あるいは渦巻文を描く。撚糸圧痕文間は刺突文あるいは円形竹管文（10）で飾られる。

この群の最も精製された土器で，器面にヘラ磨きされ，胎土の良好なものが多い。

第５群土器（第12図17～23）

縄文前期関山式期の土器を一括した。図示した資料がこの群の全てである。概して器壁は良く磨かれ，滑択をもっている。焼成良好なものが多い。17～21は結節のあるＬＲ，ＬＲの原体を転がして羽状縄文を施す。17は結節のある縄文帯下には普通の縄文が施される。12は口縁部文様帯に半截竹管による幾何学文を描き，沈線間に刻目を施，要所要所に突帯を貼り付けている。この期の精製された土器である。22は異条斜縄文の土器で，胴部にコンパス文を描いたものである。このコンパス文は黒浜期に近いものと思われる。23は沈線群で器面を飾る土器である。

第６群土器（第12図24，25，26）

縄文前期諸磯ｂ式土器を一括した。図示した資料が全てで３片である。胎土に小砂粒を含んだ焼成良好で器面のザラついた土器である。茶褐色を呈する。３片とも幅広い爪形文の土器で，爪形は右開きである。地文には縄文が施こさる。胴部下半はＲＬの縄文である。同一個体の可能性がある。

第７群土器（第12図27～30，第13図３～４）

縄文中期加曽利Ｅ式期終末期の土器を一括した。図示した資料が全てである。

27は口縁に無文帯をおき，懸垂文のみの土器である。28は口縁部の過巻文が退化し，沈線の代りに円形竹管文をめぐらしたものである。摩り消し懸垂文の部分と縄文の境は隆起している。懸垂文の上端は沈線で囲まれている。30の胴部は縄文の代りに斜行する沈線を施したものである。

第８群土器（第13図１，２，５～20）

縄文後期初頭称名寺式土器を一括した。出土量は少ない。図示したほかは同一個体が若干あるのみである。

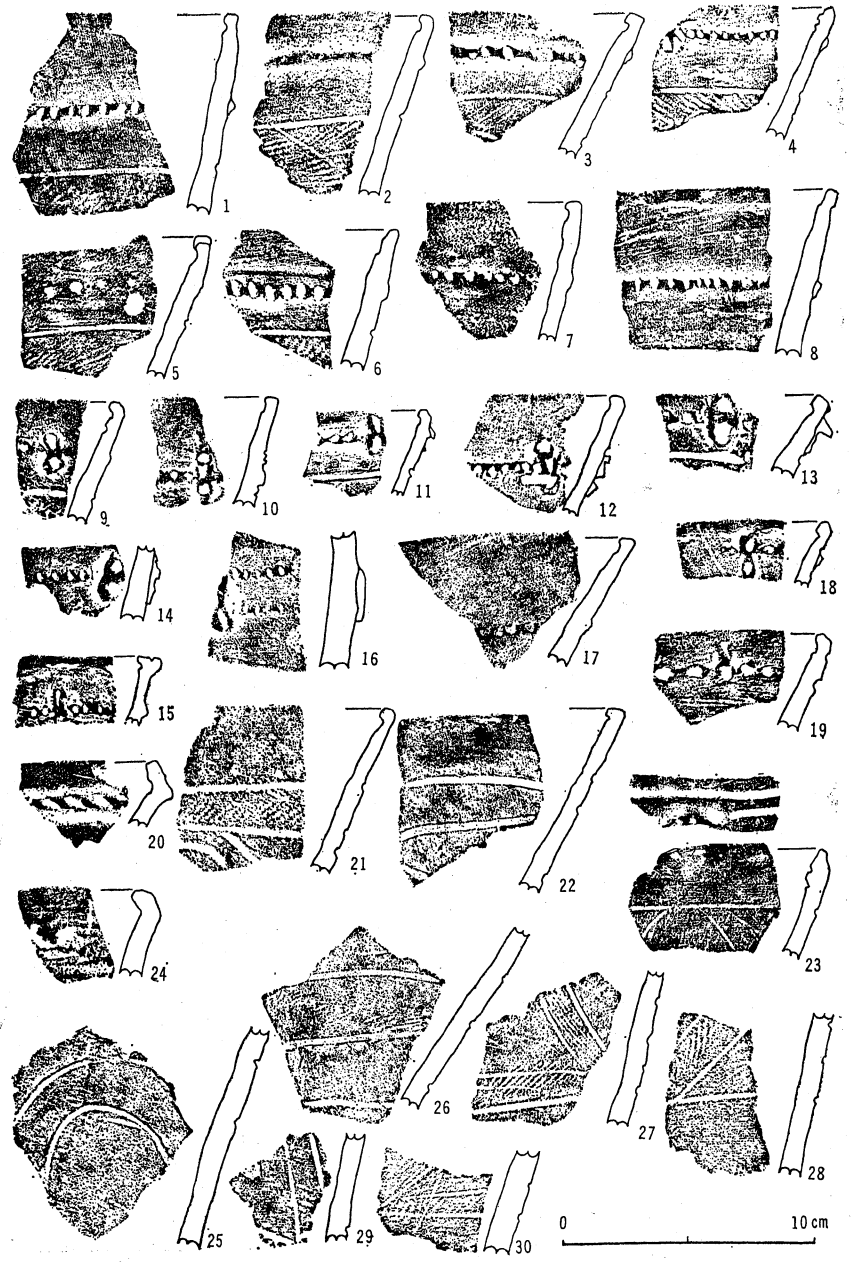
１，２は縦方向の沈線間に縄文を施文したものであるあるが縄文の回転は沈線間に沿って行なわれる。

５～18は器面に縦方向の簡単な沈線文である。屈曲した沈線の部分は７，８，９等少数で複雑な文様にはならない。この期に一般的な文様である沈線間に列点文を施すものは全くない。

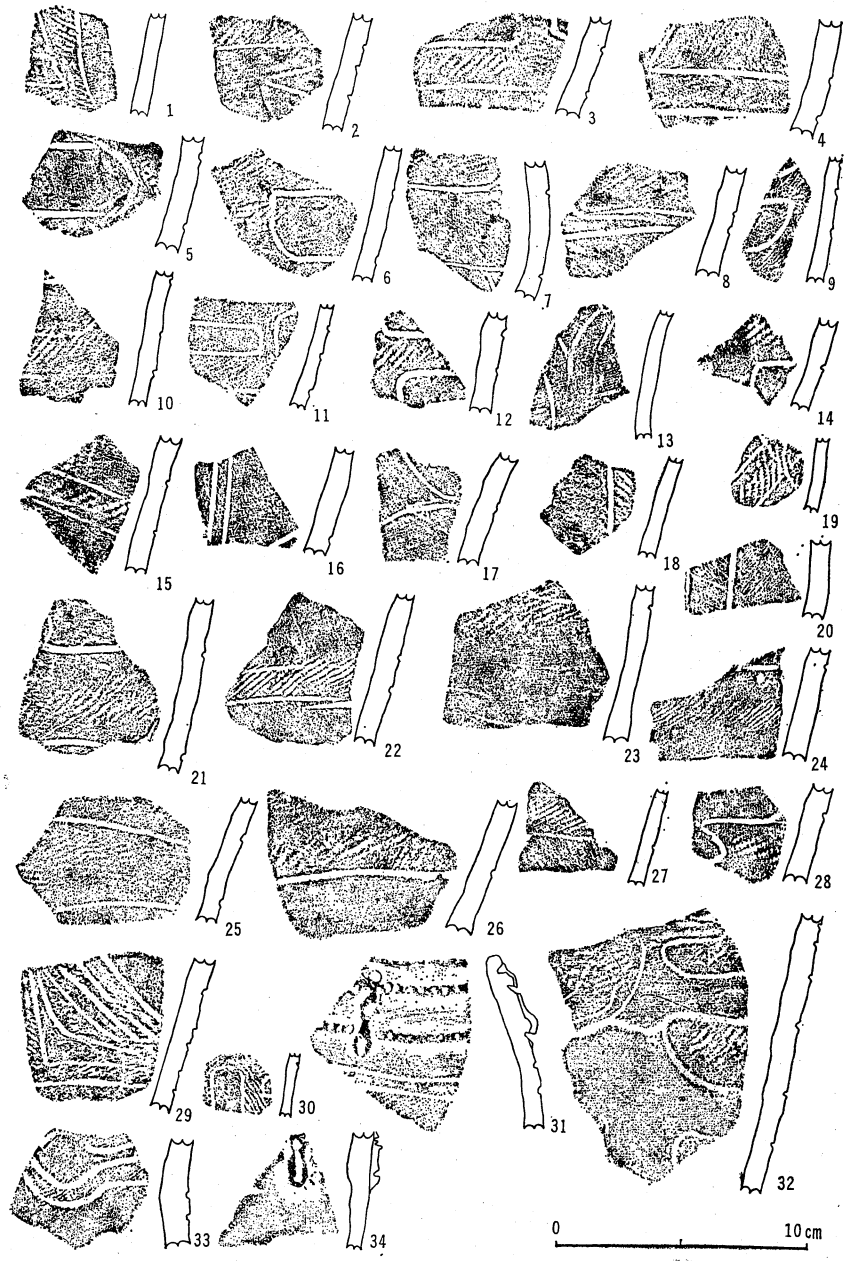
文様の施文の順序は器面全面を磨いた後沈線を描いている。この期の一般的傾向は列点文の施文されない沈線間を研磨するという手法をとるのが普通で，この遺跡の手法とは異っている。

19は沈線群で三角形のモチーフをつくる土器で，三角形間に列点を付したものである。珍らしい土器といえよう。

20は沈線間に太い列点文がある。文様の施文順位は他のこの類の土器と同様で，器面を研磨



第14図　白子宿上遺跡第10群土器拓影図



第15図　白子宿上遺跡第10群土器拓影図

した後文様の施文を行なっている。

第９群土器（第13図21～24）

縄文後期堀之内Ⅰ式期と思われるものを一括した。図示した４片のみで，主な遺物包含層は今回の発掘調査地点と異なると思われる。

21，22は口縁部に沈線の走る土器である。21は口縁部上端の沈線間に刻目が入る。22は沈線の刺突文の施される深鉢形土器で，この期の特色を示すものの一つである。23は斜行する沈線群によって器面を飾る。24は胴部に横位にめぐる沈線があり，その沈線から垂下する沈線間に刺突文のある土器である。全体の文様モチーフから称名寺式期のものとは考えられない。

第10群土器

縄文後期堀之内Ⅱ式土器を一括した。花積下層式土器とともに本遺跡の主体をなす土器である。今回発見された各種の縄文期の遺構はほとんどこの時期のものである。土器の出土量は他の時期と比べて最も多いが，包含層が破壊されているため完形品はなく，大形破片も少なかった。

第１類土器（第14図１～30，第15図１～30）

口縁が直線的に外反する深鉢形土器で，本群の代表的な土器である。全体に占める割合は最も多い。

土器のつくりは薄手のものが多く，丁寧に整形されている。口縁部の無文帯には刻目のある隆帯をめぐらしているものが多く，隆帯には要所要所に８の字状の小さな貼付文がみられる。隆帯下は沈線で文様帯の上下を幅広く区画し，その間に幾何学的文様を描くものである。沈線で区画された文様は横の連続文である。沈線間には細かい縄文が施される。縄文原体の撚りはＬＲである。

隆帯下の胴部文様帯は第14図25～30，第15図１～30にあったが，各種の変形がある。三角形状の連続文，隅丸長方形の連続文が多く，他はこの文様モチーフの変形が多い。第15図30は非常に薄手で丁寧な作りである。小形の特殊な土器であろう。文様モチーフも複雑になるようである。

なお，この他に口縁部隆帯を欠くもの（第14図21～23）や隆帯が二条になるもの（第14図21～23）がある。

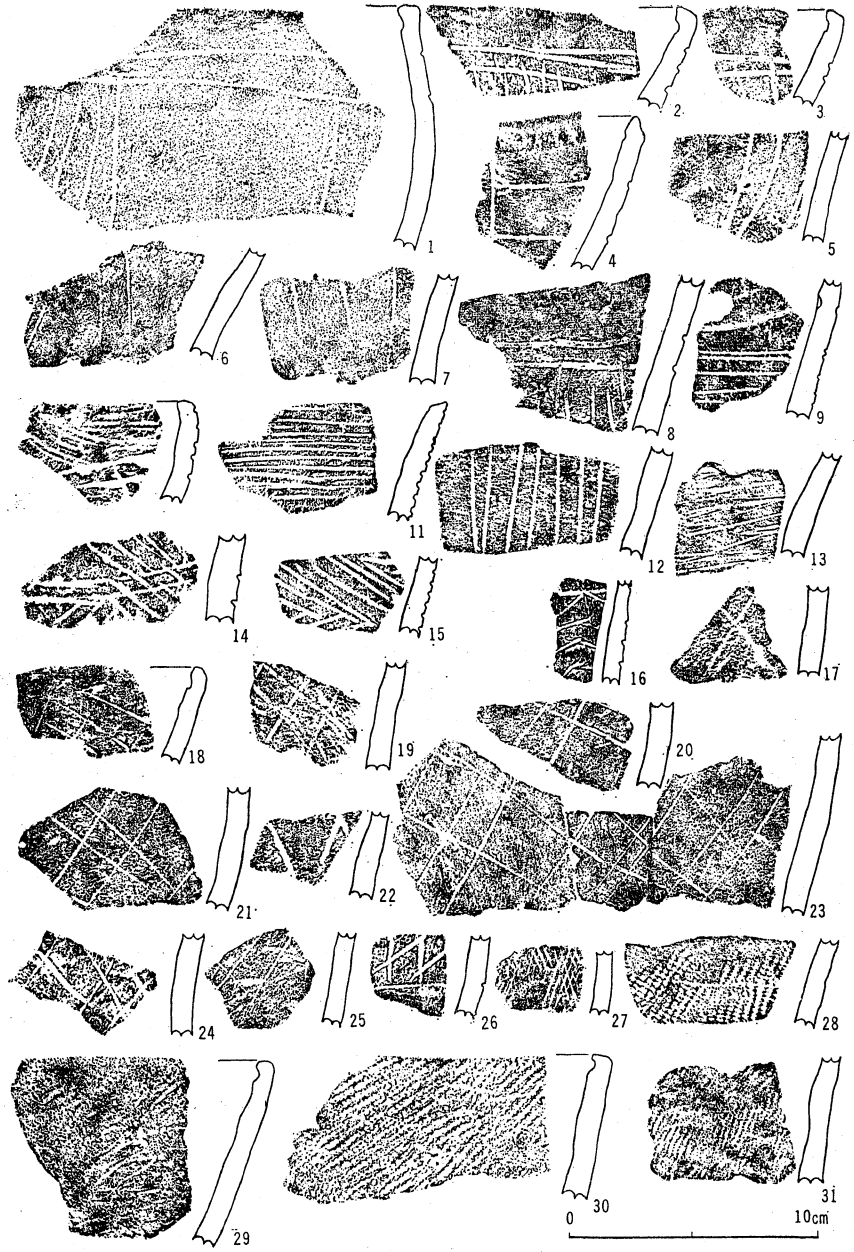
口縁部のつくりは大半の土器には口縁裏面に１条の沈線かめぐらされている。２本の沈線をめぐらすもの（第14図４，９，23）あるいは第14図５のように隆帯を口縁に貼り付けたもの，第14図15のように口唇上端を平坦に広くし，その上に沈線が施されるものがある。

第２類土器（第15図13）

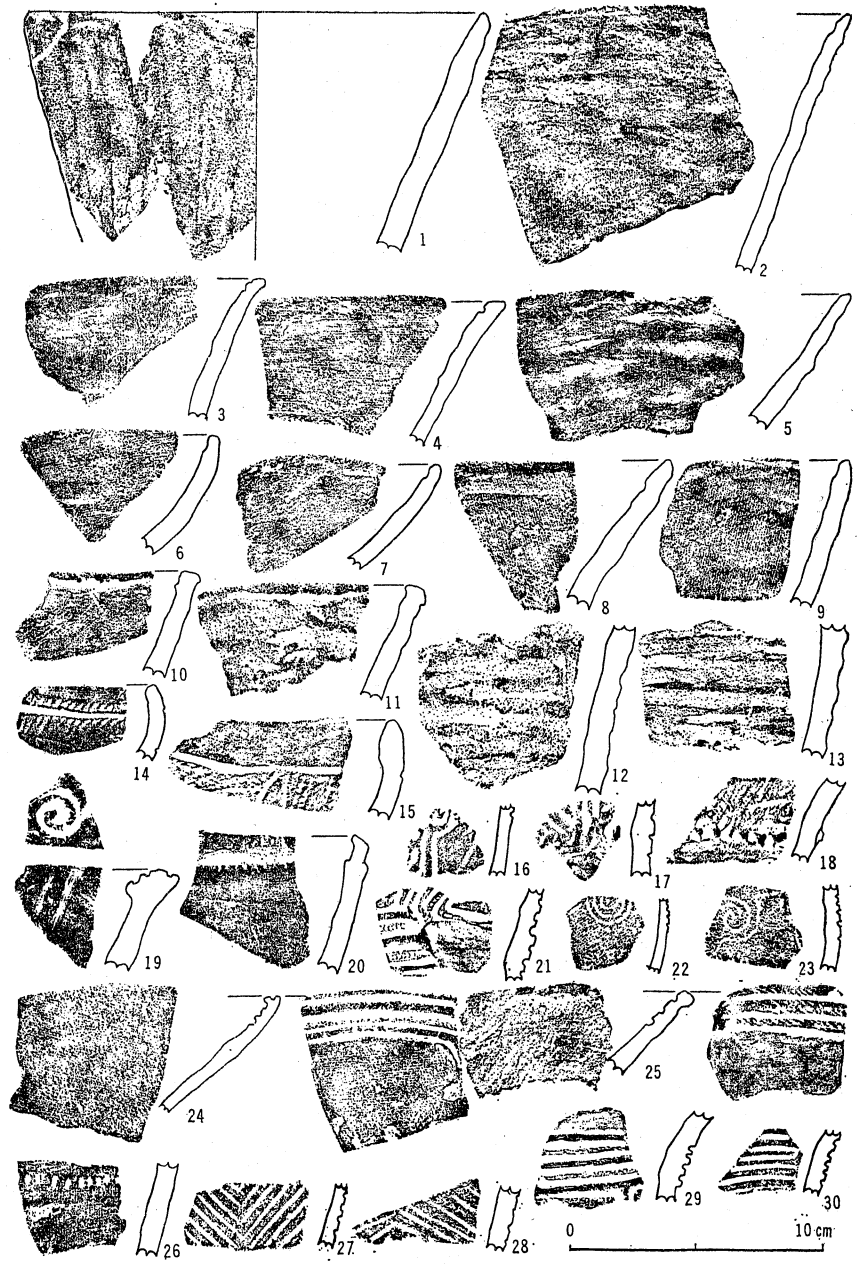
口縁が内彎する深鉢形土器とおもわれる。口縁には２条の隆帯がめぐり，隆帯上に縦の８の字状の貼り付けがある。胴部には沈帯で区画された文様帯がつく。

第３類土器（第15図32）

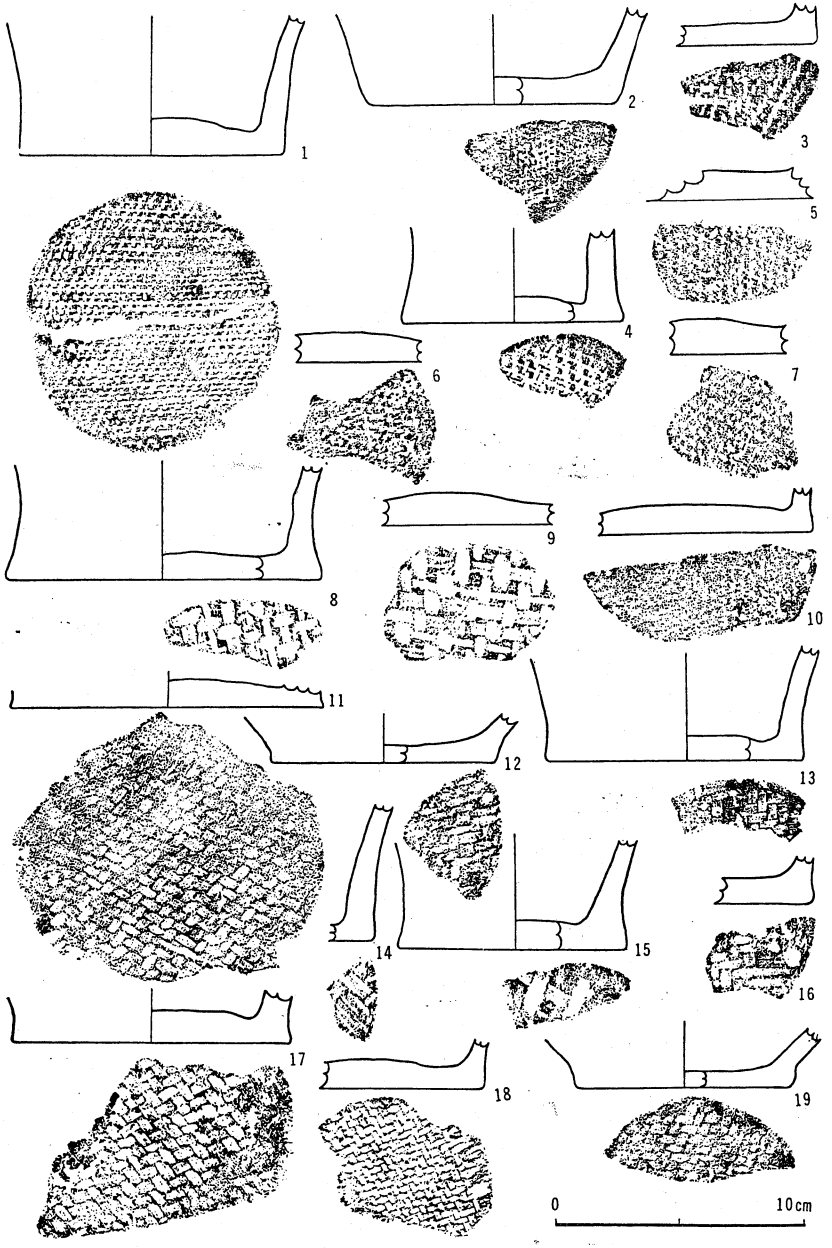
胴部に自由な曲線を描いたもので，沈線間にＬＲの縄文を施している。この期の特色である横方向のモチーフとは異なる。全体の器形の詳細は不明であるが，あまり屈曲のない深鉢形を呈すると思われる。赤褐色を呈し，器面は良く磨かれている。



第16図　白子宿上遺跡第10群土器拓影図



第17図　白子宿上遺跡第10，11群土器拓影図



第18図　白子宿上遺跡出土土器底部破片

第４類土器（第15図33）

頸部でくびれる甕形土器と思われるもの。目立ったものは図示した33のみである。平行沈線群が広がった部分である。

第５類土器（第16図１～８，12）

口縁が内彎あるいは直線的に外反する深鉢形土器で，縄文を全く欠く文様の簡素な土器である。文様モチーフは口縁下には２条の沈線をめぐらし，この沈線から縦の沈線が垂下するだけのものである。

一定間隔をあけるもの（１，８）と密に施文されるもの（２，３）がある。

第６類土器（第16図４）

２条の沈線を間隔をあけて配し，その間を横の沈線で埋めるも（４）のがある。１片のみであった。

第７類土器（第16図17～26）

直線的に外反する口縁をもつ深鉢形土器で器面に格子文が施されているものを本類とした。前類までの土器と比べると器面の整形が粗雑である。格子文も整っていない。26のように底部まで及ばず，下端を区画されるもの(27)のようなものもある。23はかなり大形の土器であろう。

第８類土器（第16図28～31）

器面に縄文のみ施文された深鉢形土器である。口縁内面には一条の沈線がめぐらされる。

この類は予想外に少なく，図示した他若干あるのみである。ＬＲの縄文が一面に施文される。第１類土器に使われる縄文に比べて縄文原体が太く荒い。

第９類土器（第17図１～13，19，20）

器面に文様を全く施文されない土器である。主体は深鉢形土器であるが，なかには６，７のような内彎ぎみの口縁を呈する浅鉢形土器もあるようである。19も口唇に過巻文のある突起をつけた浅鉢形土器である。

この無文土器は器面整形等の相違から２つに分けられる。器面全面にヘラ整形痕の凹状が連続して残るもの（１，11～13）と横位のヘラ整形によって器面を研磨したもの（２～10，20）とがある。口縁の内面に凹線がめぐるのは後者のみである。20は口縁の内面に凹線がめぐっている。

第10類土器（第17図14，16～23）

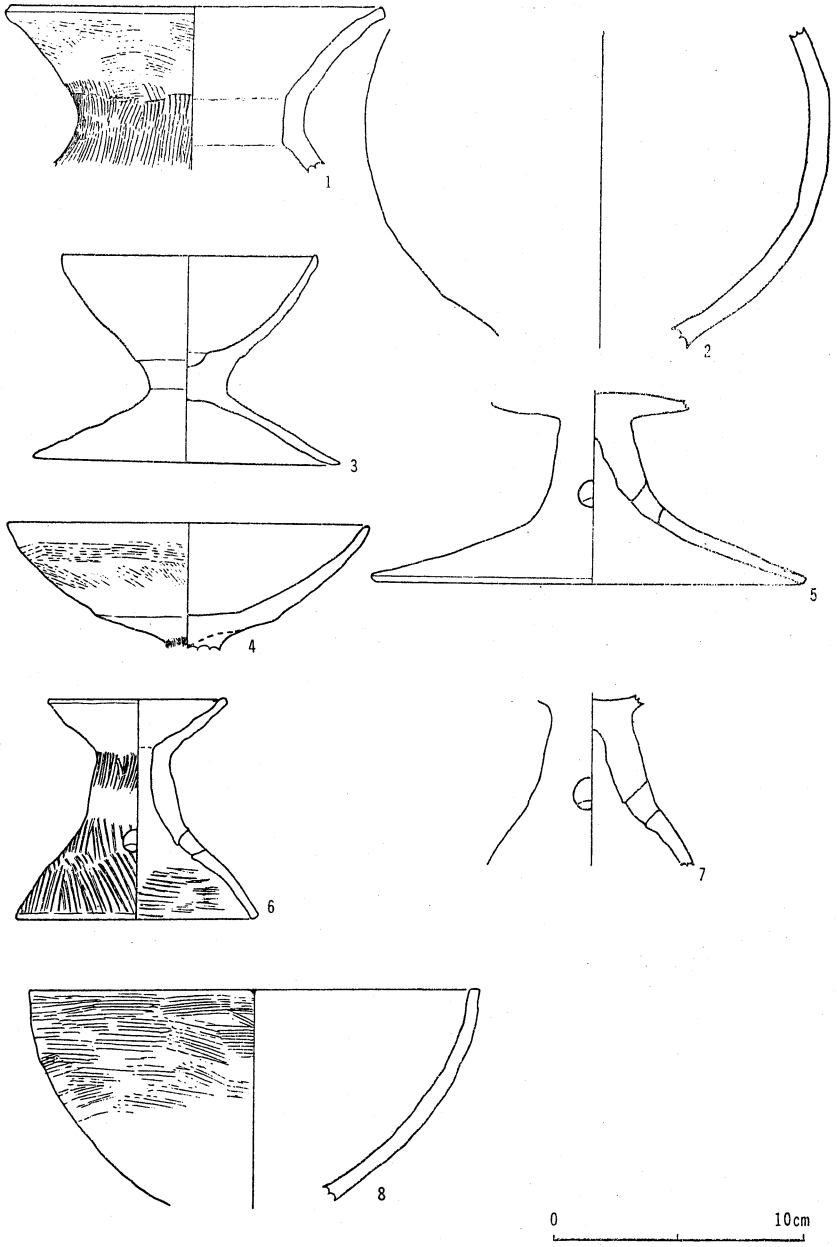
その他，特殊な土器である。明確な所属年代は不明であるが，一応ここに分類した。

14は口縁が内彎する土器である。縄文施文後沈線をひく。現存部に幾何学的な沈線の角がみられる。堀之内Ｉ期に近いと思われる。16，17は沈線により複雑な文様を描くもの，18は隆帯上半にＬＲ縄文がみられる。21は頸部のくびれた甕形土器のようである。沈線間には連続刺突文がみられる。22，23は注口土器であろう。渦巻文のモチーフがみられる。加曽利ＢＩ式期の可能性が強い。

第12類土器（第17図24～30）

加曽利ＢＩ式期の土器を一括した図示したもののみである。

24，25は外面が無文の浅鉢形土器である。内面には数条の平行沈線がめぐっている。25はＲ



第19図　白子宿上遺跡住居址出土土器

Lの縄文が施されている。黒褐色を呈する。

27，28は羽状の沈線群で埋められるもの。黒褐色を呈し，胎土，焼成の良好な土器である。

29，30は外面に横位の平行沈線をめぐらす土器で，要所要所に上下の沈線をつないでアクセントをつけている。

30は工字状の文様である。

底部破片（第18図１～９）

底部に網代のある破片を集成した。網代のある底部は全体の底部の出土量の割に多く，底部は特に全体の1/3ほどである。網代のある底部とない底部を比べても形態や底面の大きさ等両者の間には特に差がみられなかったので網代のあるもののみを図示した。

底面で張り出すものがほとんどで，２，19のような直線的な底面を示すものは少ない。

網代の組み方は２本越本潜りのものが多く，２本越２本潜りのものは少ない。３本越１本潜りは今回出土した底部のなかにはみられなかった。

網代を組む竹の幅は２本越え１本潜りの場合は狭いものが多い。なかには９のような幅広いものがあるが例外であろう。２本越２本潜りは反対に竹の幅が広いのが目立つ。

底面の整形は網代をそのまま残すものがあるが，周辺を摩り消したものが多い。

１号住居址出土土器（第19図２，４～７）

１号住居址から出土した土器は壺形土器１個体（２）高坏形土器３個体（４，５，３個体のうち１個体は盗難にあう），器台形土器２個体である。

２は胴部が球形を呈する壺形土器で，底部および胴部上半を欠く土器である。器面はヘラ磨きされ，丹が塗られている。内面の輪積痕は整形され消されている。焼成良好で緊緻な土器である。

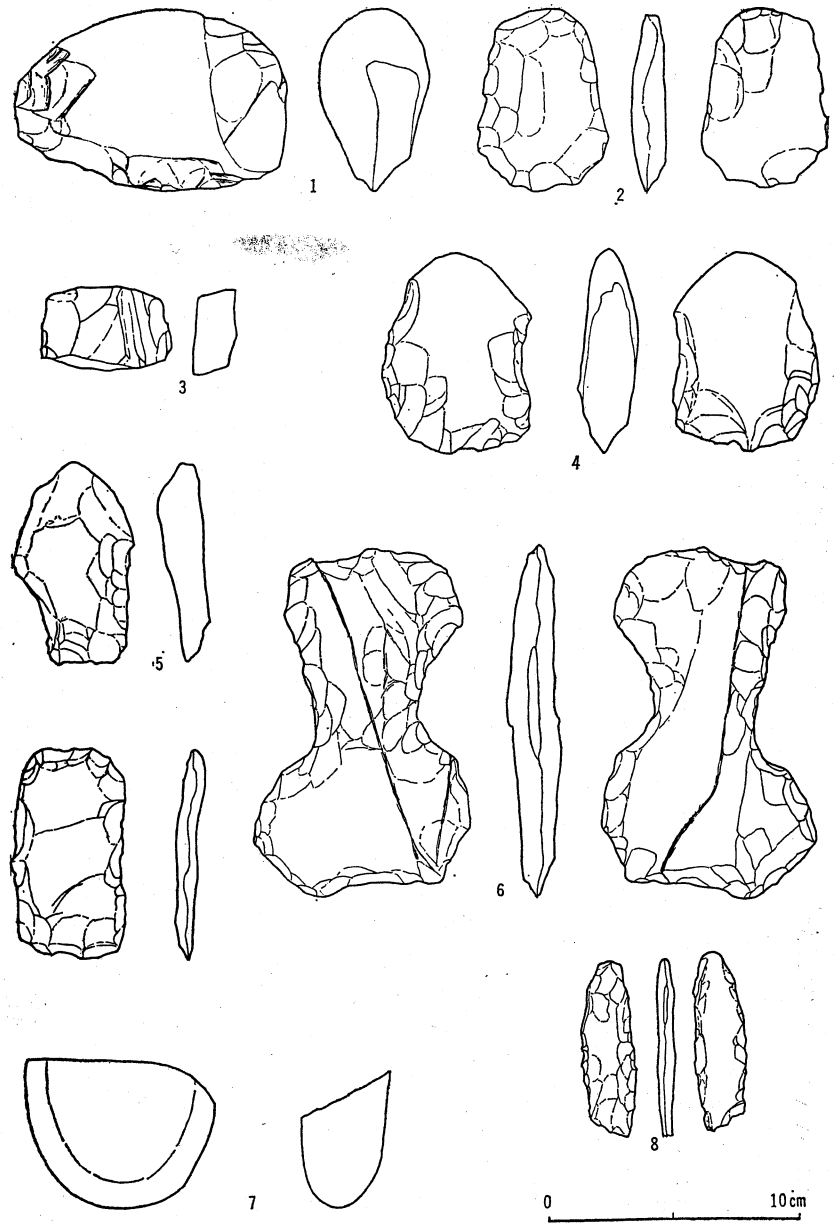
４は貯蔵穴内より出土した高坏土器で，脚部を消失している。浅い皿形に近い坏部である。坏部下端に稜が入り，急速に脚部へ移行する。口唇部形態は弥生後期に特色的は先端を切るようにして平坦にする手法は消え，丸く作られている。器面整形はハケ目を施した後，口縁上端の外面にヨコナデされ，全体にヘラ磨きされる。特に坏部下半はハケ目を消している。胎土は精製され粘土が使われ，赤褐色を呈する。器面には滑択がある。

５は床面にバラバラに散乱していた土器で，住居址廃絶時には使用されていなかったと思われる。脚部は著しく開く。坏部底面は平坦につくられている。脚部には三つの孔を有する。器面は丁寧にヘラ磨きされている。一時期古い土器と考えられる。

６は４の高坏とともに貯蔵穴内より出土したものである。坏部は脚部に比して小さく胴部で稜をもつ，脚部は立ちぎみでふくらみをもち，底面への広がりはふくらみをもって広がる。中央部は孔が穿がたれ，脚部に３つの孔がある。器面の整形は坏部がヘラナデされ，脚部は坏部接合部および脚の広がる器面に明瞭で幅広いハケ目がみられる。内面にも横位のハケ目がある。

７は床面上より出土したものである。６とほぼ同様な器形を呈しているが，器面整形はヘラミガキされる。灰褐色に近い色調を呈する。

２号住居址出土土器（第19図１，10）



第20図　白子宿上遺跡出土石器

2号住居址から出土した土器は高坏形土器1個体（1），甑形土器1個体（8）がある。本遺跡で最初に発見された土器である。

1は口縁部で「く」の字状に開く壺形土器の口縁部である。反りぎみに外反している。頸部は立ちぎみで，頸部内面に一層明瞭である。整形はハケ目を施したのち，ヘラ磨きがされる。頸部には明瞭な縦のハケ目がのこる。内面は丁寧にヘラ磨きされる。器面外面，口縁部内面には丹が塗れている。

8は椀形の甑形土器である。薄手の土器で，胎土は砂粒を含み，脆い土器である。口唇土端は平坦に作られる。器面には細かいハケ目がみられるが胴下半は摩り消されている。内面はヘラで磨かれるが粗雑である。ススの附着が著しい。

第4号住居址出土土器（第19図3）

第4号住居址出土土器は高坏形1個体のみで，他に甕形土器破片が1片あったのみである。坏部は椀形の器形を呈し，脚部は直線的にのびる。脚の高さは低い。また孔はない。坏部底面には凹みがつけられる。器面はハケ目整形された跡は全く残されていない。ヘラ磨きはされずザラついた器面を呈している。

石器（第20図）

今回の発掘によって得られた石器は全てで9点である。その他，発掘前，耕作によって得られた石鏃が多数ある。出土したものは礫器2，打製石斧5点，尖頭器1点，磨り石1点である。

1は礫器で河原石を横長に使用し，片面のみを両側縁および刃部に簡単な剝離をしている。ホテルフエンス製である。全長2.8㎝，幅10.5㎝，厚さ4.2㎝。

2，3は片面に広く自然面を残している。2は第一次剝離面を大きく剝離して石斧を作り出す。裏面は一部を浅い大きい剝離を行なう。砂岩質である。全長7㎝，幅5㎝，厚さ1.4㎝。3は片面のみ深い大きな剝離がされている。硬砂岩である。幅5.2㎝，厚さ1.5㎝。

4は礫器の一種で，河原石を縦長に使用し，両面を両側線，刃部に乱雑な剝離を加えてつくられたものである。全長7.8㎝，幅5.6㎝，厚さ1.4㎝。

5は刃部を幅狭く作り出した打製石斧である。先端は直線的である。剝離は狭く作り出した刃部を丁寧に加工している。安山岩製の石質である。全長7.8㎝，幅4.5㎝，厚さ1.7㎝。

6は典形的な短冊形の打製石斧である。裏面には自然面を残し，両側辺，頭部，刃部には簡単な剝離がみられる。粘板岩製である。全長8.2㎝，幅4.2㎝，厚さ0.8㎝。

7は大形の分銅形石斧である。抉り込みのある部分に細かい剝離が集中している。頭部は大きな剝離がられ，頂部側縁に沿って細かな剝離を行ない刃部を作り出している。全長13.8㎝，幅8.5㎝，厚さ1.8㎝。

8は楕円形の磨石の破片である。全体に丸みがあり，角はほとんどない。磨石の先端，両側縁ははよく磨られている。花崗斑岩である。幅7.4㎝，厚さ1.8㎝。

9は全体に細身のつくりの尖頭器である。先端は欠失している。裏面は大きく自然面を残し側縁のみに若干の剝離がみられる。粘板岩製である。幅2㎝，厚さ0.7㎝。（谷井）

6. まとめ

白子宿上遺跡の概要は以上述べてきたとおりである。最後にいくつか気のついた点をまとめる。

白子宿上遺跡の位置

花積下層式期の遺跡は非常に少ない時期の一つで，埼玉県の荒川右岸では内畑遺跡（註1）についで2番目に発見された遺跡である。

従来発見されているこの時期の遺跡は貝塚を構成することが多いが，近年，この期の遺跡の発掘例には貝塚を伴なわない遺跡が多く発見されているので，今後両者の性格を比較検討する必要があろう。この期の大規模な調査が期待される。

縄文後期の遺跡も埼玉県内で調査され，内容の発表された遺跡数は他の時期に比べると少くない。とくに，縄文後期でも堀之内Ⅱ式土器が単独で出土した例はほとんどないようである。旧新座郡下では縄文後期の遺跡は初めて発掘されたものである。

この地区で現在まで発見されている後晩期の遺跡としては鎧田遺跡（註2）が知られているが，その他の遺跡は和光市内に集中している。現在までわかっている和光市内の遺跡は吹上遺跡（註3），四ッ木遺跡（註4），丸山台遺跡（註5）があり，どの遺跡もかなりの規模である。このように縄文後期の遺跡が和光市周辺に集中して分布していることは注目されよう。

縄文後期の遺跡が立地しているところは広い沖積地を望む台地上が多いが，丸山台遺跡のように湧水の源に近い小さな谷に面したところにも進出している。丸山台遺跡のような環境では漁撈活動は不可能であり，もし，この遺跡が集落を構成するとすれば生活基盤を漁撈活動においていないことを示していよう。一方，白子宿上遺跡にも土錘等の漁撈関係遺物は1点も発見されていない。このことは，千葉県下にみられる大貝塚群に代表されるように関東東部の縄文後期の遺跡が漁撈活動に生活基盤をもっているといわれるが，この地区では必ずしもそうとはいえないことを示していると思われる（註6）。

この周辺の武蔵野台地縁辺部では弥生後期から古墳時代前期にかけての遺跡の数が非常に多い（註7）。広い沖積地に望む台地の縁辺部ではほとんどの場所がこの時期の遺跡となっている。このように多数の遺跡が近接して存在することは集落相互の接触が頻繁に行なわれていたことがであろう。。

弥生後期から古墳時代前期の遺跡が占地しているところはほとんど広い沖積地に面した台地上に限られ，水田耕作の不可能な小さな谷には進出していない。これは当時の生活基盤が水田耕作におかれていることによると思われ，いまだ水田耕作を主とし，畑作のみに頼ることができなかったことを示していると思われる。

後続する和泉期になるといままで多数の遺跡が知られていたにもかかわらず，遺跡の数が激減している。この傾向は全県的にみられるもので，遺跡の規模も小さなものが多い（註8）。

炉穴について

今回発見された炉穴は直径90cm程度の円形のピットの中に焼土が若干みられた程度のものが2ヶ所であった。ピットのローム層への掘り込みも浅く底面もあまり焼けていなかった。

埼玉県内でいままで炉穴の発見されている遺跡は五味貝戸貝塚（註9），下加貝塚（註10），諏訪山遺跡（註11），膳棚遺跡（註12）等があるが，これらの炉穴は複雑に入り組んでいたり，長方形の炉穴が集合したりしており，本遺跡の炉穴に比べて規模が大きい。また県外で発見されている炉穴にしても同様な構造のものである。これらに比べて本遺跡発見の炉穴は従来発見されているものに比較しても小規模であり，性格が同一のものかどうか不明である。今回の発掘では面積が少なく，茅山期の良好な包含層もみられなかったので，このような小さな炉穴が大形の炉穴に伴っていたのか，あるいは単独で存在していたかは不明である。全体の調査を待たねばならない。

炉穴内より出土した土器はともに条痕文土器の細片が数片発見されたのみであったため，正確な構築年代を直接判断することが困難である。ただ，この遺跡出土の茅山系の土器が野島式土器である点を考慮すれば野島式期とするのが適当であろう。

また，県内の炉穴の年代をみると五味貝戸貝塚が野島式期，下加貝塚が鵜ヶ島台式期，訪諏山遺跡が野島式期である。県外の主要な炉穴も茅山下層式期の炉穴と称されるものが1例（註13）あるのみで他はそれ以前のものである。

このように炉穴の発生が子母口式期に始まり（註14），野島式期，鵜ヶ島台式期に最盛期を向えている点から本遺跡の場合も野島式期に比定してもあながち的が外れていないとおもわれる。

土壙群について

土壙は発掘区の北西コーナーに集中して発見され，他の部分ではいくつかのピットが存在するのみであった。これは土壙が遺跡全体に散漫に分布しているのではなく，一定の群をなして存在していたことを示していよう。

土壙の形態は楕円形を呈し，底面が丸底状のもの，円形プランの丸底状の底面をなすもの，不整の方形を呈し，平坦な底面をなす浅い土壙の3種類に分類される。

これらの土壙の多くは茶褐色土が堆積しているのみで，特に目立った特色はなかった。

ただ，土壙11は覆土の堆積状態が特に注目される。土壙の底面および壁面には薄く黒色土があり，その上にローム土を人為的に埋めるという特殊な堆積状態であった。

このような土壙は現在知られている例は少なく，県内では内畑遺跡，天神山遺跡（註15）があるのみで，性格は不明である。他の土壙群との関連から究明する必要があろう。

土壙群が一定の地域に集中発見されるようになるのは縄文中期中葉から後期にかけてが多い。特に縄文中期終末期からは集落址の発掘例が減少し，土壙群が単独で発見されることが多く，このような土壙群が集落跡と分離して存在するとともに土壙群の規模が大きくなっていることを示している。またこのことは日常生活に伴うものでないことを示していよう。

土壙群の性格については従来から貯蔵穴，墓址等多くの説が唱えられてきたが，近年土壙の発掘例が多くなり，詳細に論じられるようになった（註16）。現在大方の見方は墓址的性格が強いのではないかといわれるようになっている。

今回発掘した土壙群を墓址として積極的に裏付ける資料はないが，従来発掘されたものと大差はなく，一応ここで墓址的性格をもったものとはしておこう。

なお，土壙の群性格を究明するには単に土壙のみの分析だけでなく，神奈川県の馬場遺跡（註17）にみられるような配石遺構，あるいは大湯遺跡や巾田遺跡（註18）にみられる環状列石等を含めた当時の葬制全搬を検討するなかで進めてゆく必要があろう。

土器について

本遺跡の撚糸文土器群は器面の装飾として撚糸文と縄文がみられる。これらの土器は口唇部形態等の特色から縄文草期前半稲荷台式期の土器である。稲荷台式土器が主体的に分布しているのは関東地方である。一方これに反して押形文土器は西日本や中部地方に分布し，関東地方の文化とは異質な背影をもつ土器である。

この押形文土器がが関東地方の土器に混って出土することは戦前から知られていた。（註19）この押形文土器が関東地方に出現する時期については従来から種々論じられてきたが，戦後縄文早期の遺跡の発掘（註20）によって現在では一応平坂式期に始まるとされるようになった。埼玉県でも従来発見されている押形文土器を出土する遺跡では三戸式期から田戸下層式期に限定されていた（註21）。

本遺跡の場合押形文土器はわずか4片であったが，この押形文土器の主体と言われる田戸下層式土器の沈線文土器群の検出につとめたが，1片も発見することができなかった。本遺跡の場合，この時期の土器の量が少なかったため，たまたま田戸下層式土器等がみられなかったという可能性もあるが，ここであらためて撚糸文土器と押形文土器との共伴について考えてみる必要があろう。

近年，多摩ニュータウン№269遺跡でも同様な共伴関係を示しており，その可能性を論じている（註22）。ただ，本遺跡の押形文土器のなかに楕円文の土器が1片存在し，押形文土器のなかで新しい要素とされているので問題もあるので今後の検討にまちたい。

野島式土器は出土量が少なく不明なところが多いが，城の台貝塚（註23）でみられたような粗雑な隆起線を口縁に垂らしたのみの文様の簡素な土器が出土しており，2つに分類できる可能性もある。

花積下層式期の遺跡は他の時期に比べて発掘例が少なく，埼玉県では現在まで目沼貝塚（註24）舟山遺跡（註25），南遺跡（註26），花積貝塚（註27），天神山遺跡（註28），内畑遺跡（註29）等がある。これらの遺跡は舟山遺跡を除けば当時の海岸線の近くに位置している。

各遺跡の土器はやや新しい時期のものと考えられる目沼貝塚の土器を除けば，ほぼ同様な土器によって構成されているが，それぞれの土器の占める割合は各遺跡によって相違があるようである。

たとえば丘陵地にある舟山遺跡の場合は貝殻背圧痕文土器が数片出土しているのみで，他の遺跡に比べるときわめて量が少ない。このことは舟山遺跡が丘陵地にあるという遺跡の自然環境によるところが多いと思われる。

一方，関東東部の茨城野中貝塚（註30）や大串貝塚（註31）では貝殻背圧痕文土器はほとんど出土していない。ただ，花積下層式土器の主体となる羽状縄文土器には差異がほとんどない点からすれば，貝殻背圧痕文や条痕文土器の多少によってのみ編年問題を云々するよりそれぞれの遺跡のおかれている位置によって組合せの差違が表われると解するのが適切であろう。

上述したような問題を含め，従来から花積下層式土器の細分に関する問題が種々論じられてきた（註32）が，最近花積下層式土器直前の早期末葉の資料が相次いで発見され（註33），茅上層式期から花積下層式期に至る空白（註34）が埋められつつある。これらの資料によれば花積下層式期直前には関東地方の茅山系の土器とは異質な東海地方の影響を受けた土器を主体として構成される土器群が分布していることが明らかになりつつある。

このことは花積下層式土器が前時期から発展した形で出現するのではなく，東北地方の縄文系土器群の進出という文化的背影（註35）下に関東地方が置かれたため突然出現したものと推定されるようになった。

従来発見される花積下層式土器のなかに条痕文土器がしばしば混在していることはこのような花積下層式土器発生の背影が大きく帰因していると思われる。

堀之内Ⅱ式土器は今回の発掘調査で最も出土量が多かった。ほとんど破片であったが，他の時期の土器の混在が少ないので堀之内Ⅱ式土器の様相を知るうえで良好な資料といえよう。

堀之内Ⅱ式土器の構成で特に目立った点はその7割を幾何学的な磨り消し縄文の土器で占められ，格子文の土器や縄文のみの土器あるいは無文の土器が予想外に少なかったことである。

この時期の遺構としては土壙のみであった。土壙は互いに隣接したり，切り合ったりしていたが，土壙中から出土した土器の場合ほとんど差異がなかった。このことは土壙の築成時期に幅があるが，この間土器の方はほとんど変化していないことが推定される。また，他の遺跡で発見されている堀之内Ⅱ式土器でもほぼ同様な様相を示しており，中間型式とおもわれる土器は非常に少ない。このことはある一定の期間，土器製作意図が安定していたことを示していよう。

石器

石器はほとんど打製石斧で，1点磨石があったのみである。土器との伴出関係は層位的には不明であった。

1のような横長の礫器は茅山系の土器群に伴出することも多いが，剝離が茅山式期に伴う石器の剝離に比べて粗雑な点を考えれば撚糸文土器とするのが適当と思われる。

茅山系の土器に伴う石器は裏面に自然面を残し，剝離が大きいのが特色である。これに比べて第20図5の打製石斧は礫器で大きく自然面を残しているが剝離が浅く花積下層式期と考えられ，石器の剝離は先端のみを粗雑に行なっている。

他の石器は堀之内Ⅱ式土器に伴出する石器と考えられる。第20図7は縄文後期特有の分銅形石斧である。8は中期的な短柵形の打製石斧であるが，時期については堀之内Ⅱ式期といえよう。

（谷井）

註1　谷井彪「内畑遺跡発掘調査報告」　埼玉県遺跡調査会報告　第七集　昭和45年

註2　井田実「埼玉県北足立郡新座町片山鐙田遺跡の晩期縄文式土器」台地研究15　昭和39年

註3　東は白子川に面している。縄文中期から古墳時代に至る土器が出土し各所に保管されている。

註4　縄文後期・晩期の大きな遺跡である。地表には堀之内式～安行式土器が散布している。先日，真間期一括土器と安行Ⅰ式土器が出土している。

註5　谷中川の一支流に面する遺跡で，台地奥に入り込んでいる遺跡である。縄文後期堀之内式期の遺跡である。

註6　岡本勇・戸沢充則　縄文文化の発展と地域性「関東」　日本の考古学Ⅱ　昭和40年

註7　谷井彪・高山清司「大和町の遺跡と出土土器（弥生・古墳時代）」埼玉考古6号　昭和43年

註8　旧新座地域では和泉式期の大きな遺跡はほとんど知られていない。また，全県的にみても古墳時代前期の時期に比して圧倒的に少ない。土器の製作技法も大きな変化がみられ，時代の変換点とも考えられる。

註9　岡本健児・佐野大和「指扇五味貝戸貝塚」古代文北第13巻9号　昭和17年

註10　大宮市史第1巻　考古編

註11　横川好富・城近憲市ほか「諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡発掘調査報告」埼玉県遺跡調査会報告　第8集　昭和46年

註12　嶋崎弘之・岩井住男・佐原和久・藪原和男「膳棚」鳳翔7号　昭和45年

註13　塚田光「千葉県海老内遺跡群の調査報告―縄文時代の炉穴」下総考古2号　昭和40年

註14　安孫子昭二「№188遺跡」多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅴ　昭和43年

註15　柿沼幹夫氏より御教示

註16　早川智明・梅沢太久夫「椚谷遺跡発掘調査報告」埼玉考古第8号　昭和45年

註17　杉山博久・神沢勇一「馬場遺跡の縄文時代配石遺構」昭和44年

註18　金子浩昌・米山一政・森島稔「長野県埴科郡戸倉町巾田遺跡調査報告」長野県考古学会

誌　第2号　昭和40年

註19　白崎高保「東京稲荷台先史遺跡」古代文化第12巻第8号

註20　平坂貝塚・夏島貝塚・大丸遺跡等の発掘調査による。

註21　三上嘉徳・宮内正勝「水判土遺跡」大宮市教育委員会

註22　可児通宏「№269遺跡」多摩ニュータウン遺跡調査城告Ⅳ　昭和42年

註23　吉田格「千葉県城ノ台貝塚」石器時代№1　昭和30年

註24　早川智明・庄野靖寿「杉戸町目沼遺跡」杉戸町教育委員会　昭和39年

註25　埼玉大学考古学研究会「舟山遺跡展」鳳翔2号　昭和41年

註26　註11に同じ

註27　下村克彦「花積貝塚」第2回遺跡発掘調査報告会発表要旨　昭和44年

註28　註5に同じ。筆者実見。

註29　註1に同じ。

註30　江坂輝弥「茨城県野中貝塚調査報告」考古学雑誌，第39巻第3・4号　昭和29年

註31　田沢金吾ほか「大串貝塚」史前学雑誌第9巻第2号　昭和26年

註32　江坂輝弥「縄文式文化について(7)」歴史評論第29号　昭和26年
坂詰秀一「新作貝塚調査報告」川崎市教育委員会　昭和38年

註33　岡本勇「下吉井遺跡」神川県教育委員会　昭和45年

註34　茅山上層式土器には東海地方に分布する粕畑式土器伴が出し，一方花積下層式土器には古くから木島式土器が伴出することが知られている。東海地方の編年によれば粕畑式土器と木島式土器の間には上の山式，入海ⅠⅡ式，天神山式，石山式の型式の土器があり，関東地方ではこれらの時期に並行する土器が発見されていなかった。

註35　林謙作　縄文文化の発展と地域性「東北」日本の考古学Ⅱ　昭和40年
縄文早期末から前期初頭にかけて縄文施文の手法が急速に隣接した地域へ広がつてゆく。

あ と が き

10年ぶりの発掘調査である。

これを企画し，いざ実施してみると，いかにむずかしいことかいまさらながら考えさせられた。

炎熱下の８月初旬より12日間，ほこりと汗にまみれた苦しい発掘作業であったが，みなさんの団結と指導者の適切な指導助言により支障なく終了することができた。この調査は県教育局社会教育課専門員柳下敏司先生，文化財係谷井彪先生の指導と市内文化財委員各位の熱意により計画され，実現したもので，特に土地所有者との交渉は委員長富沢譲太郎氏の労によるものである。

発掘調査は，埼玉大学考古学研究会の諸君を中心に朝霞高校社会部の生徒及び市内中学生の諸君にお願いし，若い力を存分に発揮し，その成果を納めることができた。

特に調査期間公民館に宿泊しての埼大生の献身的な活躍が強く印象に残っている。衷心より敬意と感謝を申し上げる次第である。

大都市の余波をうけ宅地造成あるいは交通機関の発達による環状道路の建設などさまざまな形で土地開発事業が行なわれている。そのたびに遠い祖先が残していってくれた遺跡，遺物が破かいされてゆくことは，ほんとうにうれいべきことである。

本書はこうした事実を考え記録保存し，後日に残すためにまとめたもので，内容等に専門的な用語を使っているためおわかりにくい点もあると思われるが大いに活用されることを期待している。

おわりに期間中終始ご協力いただいた土地提供者新坂一夫氏及び発掘に参加された各位に厚くお礼を申し上げるものである。表題文字は冨岡教育長をわずらわした。

昭和46年４月１日

和光市教育委員会事務局
（永長記）

昭和46年４月１日印刷発行
非 売 品
編集兼発行者　冨　岡　吾　良
印　刷　所　文永社印刷株式会社
発　行　所　和光市教育委員会